

第2図 層位断面図(1/60)

またところどころ、黒色土が厚く堆積した埋没谷が検出されている。そのうちの3号埋没谷と5号埋没谷の頂部を結んだ線上に、シラス地形に起因する陥没坑があり、そこから古墳時代前期の土器が一括出土している。「土器埋納遺構」と名付けた遺構で、祭祀に関連するものと考えられる。

さらに、後述するⅢ層以下の層準で、少量ながら遺構・遺物が確認された。縄文時代草創期および早期の文化層が遺存していたものと見られるが、第2遺跡同様、実際に掘り下げを行った範囲は、ごくわずかにとどまった。

層序は、基本的には近接する第2遺跡のそれと変わらないが、近世における遺跡形成がなされなかつたため、I b層が認められないことや、II層が凹部にのみ見られ、面的には存在しないことなどが主な相違点である。第2図の層位図は、調査地中央部における層位の状況を示している。

I～Vの基本層序についての概略的説明は、報告書第1集、あるいは第2遺跡での記載に譲り、ここでは当地区での特徴的な事象を中心に記述しておく。

I c層 第2図にはあらわれないが、褐色を呈する遺物包含層である。アカホヤ火灰のバミスを含む。

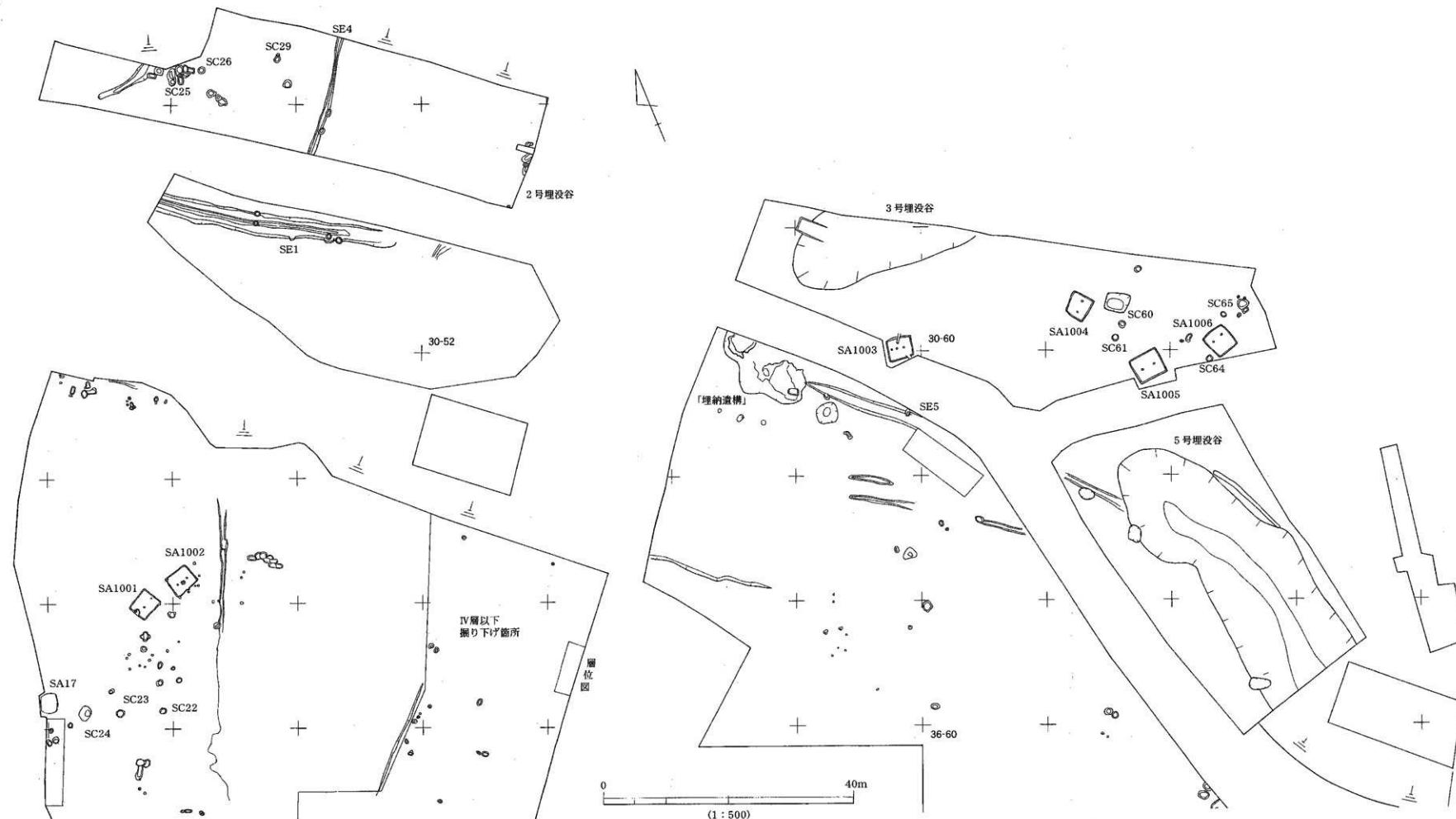
第2遺跡のI c層と同系統の層と見られるが、本遺跡のI c層は、場所によってはより黒味が強くなり、古墳時代の遺物を包含する。

III層 「アカホヤ」層で、約10～20cmの厚さでIV層以下を覆っている。ただし調査地西側では、耕作に伴う削平の影響で、ほとんど遺存しない。

IV層 黒褐色の硬質土で、白色の小粒子を含む。

V層 IV層よりも明るい色調の褐色硬質土である。IV層とV層の間には、中間的な色調の漸移層があり、その層準で縄文時代早期の遺物が出土する。さらに、このVI層の下位でも、わずかであるが土器片が出土している。小破片であり特徴は捉え難いが、出土レベルより縄文時代草創期のものと推測される。

VI層 黄褐色を呈し、層中に黄橙色の火山降下物（霧島小林軽石）を含む。



第3図 上の原第1遺跡遺構分布図(I) (1/500)



第4図 上の原第1遺跡遺構分布図(2) (1/500)

第2節 調査の記録

1 III層上面検出の遺構・遺物（中～近世）

中世から近世にかけての遺構で、ある程度内容が明らかにできるものは、溝状遺構5本がその全てであり、土坑についてはその性格を判断する材料がほとんど皆無であった。

溝のうち、3号溝としたL字形に屈曲する溝と、4号溝は近世末以降の比較的新しい時代の所産である。1号溝と5号溝（同一か？）は、断列化しながらも調査地を横断するもので、道路としての機能が推定できるのかも知れない。ただし遺物が少なく、時期については判然としない。

2 III層上面検出の遺構・遺物（古墳時代）

（1）竪穴住居跡

調査地北半で方形の竪穴住居跡が6基検出された。一部は弥生時代終末期に属すると見られる。なお、竪穴については第2遺跡と同じく、縄文時代のそれに1号からの番号を付しており、混同を避けるために1001～の番号を付した。

1001号竪穴住居跡（第5図）

34-48杭の西で検出された。平面規模は3.5m×4.0m、検出面から床面の深さは約30cmを測る。覆土は明るい褐色を呈し、アカホヤのブロックや炭化木を多く含んでいる。炭化木も認められた。床面は、部分的にアカホヤのブロックで固めている様子がうかがえた。壁際には部分的に壁帶溝が認められる。また南西側の壁際には浅い凹部がある。主柱穴は2本と見られるが、やや東側に寄っているように見受けられる。

遺物は床面より数cm上位の位置より出土しており、炭化木も同一レベルにあった。小形の甕（1）や鉢（2）は完全に遺存する個体である。2は丁寧なミガキ調整を施し、口縁下部附近に1箇所、貫通孔を穿つ。底部は尖り気味の小さな平底となる。3は砾石で、使用により磨面が平滑になっている。

1002号竪穴住居跡（第6図）

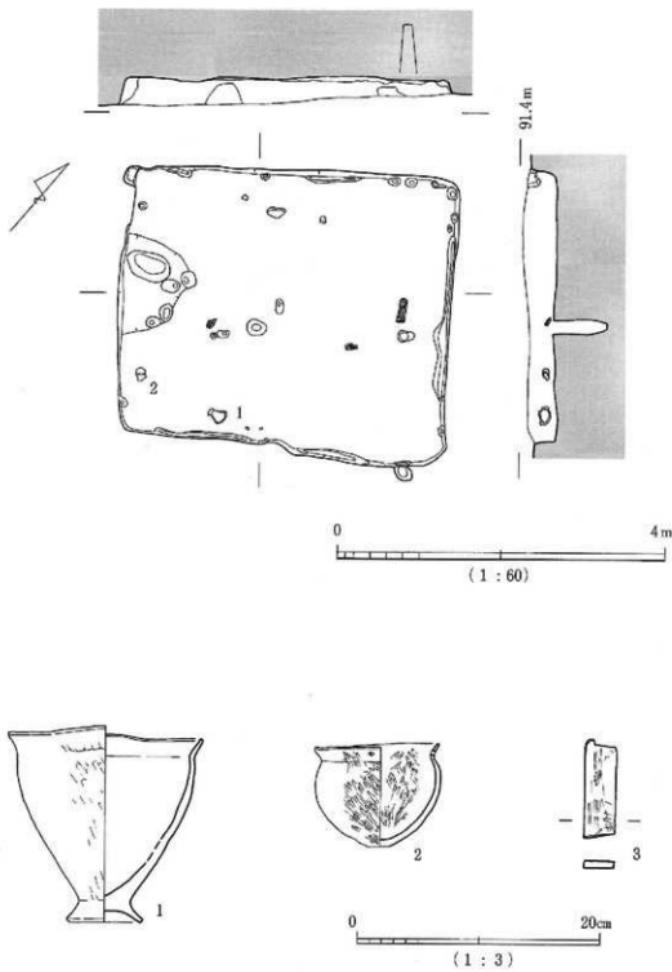
1001号竪穴住居跡の東に隣接する。平面規模は3.5m×4.3m、検出面から床面までの深さは約15cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、やはりアカホヤブロック、炭化物を含む。壁際には壁帶溝があるが、ところどころ断列化している。主柱穴は2本で、それらを結ぶ線のやや南東に土坑がある。この土坑内より6の扁平碟が出土している。

この竪穴住居跡においても、遺物、炭化木は床面より数cm上位のレベルで出土している。4・5は壺で、5の底部には線刻文が認められる。

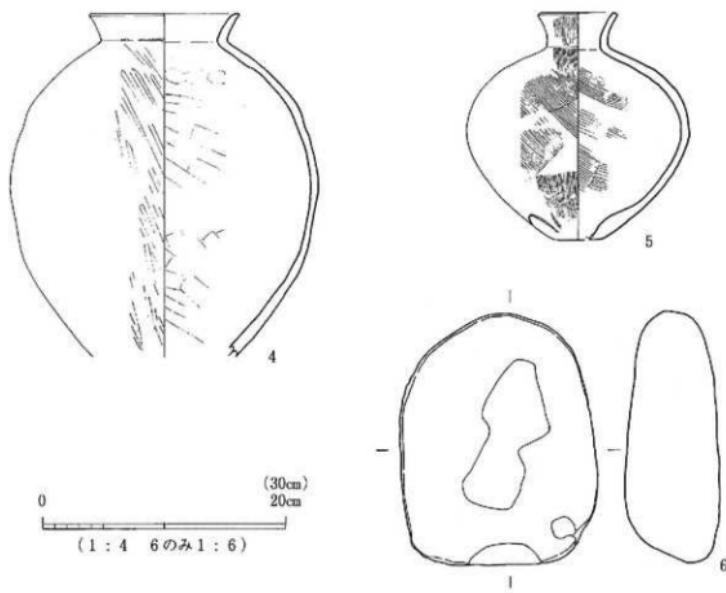
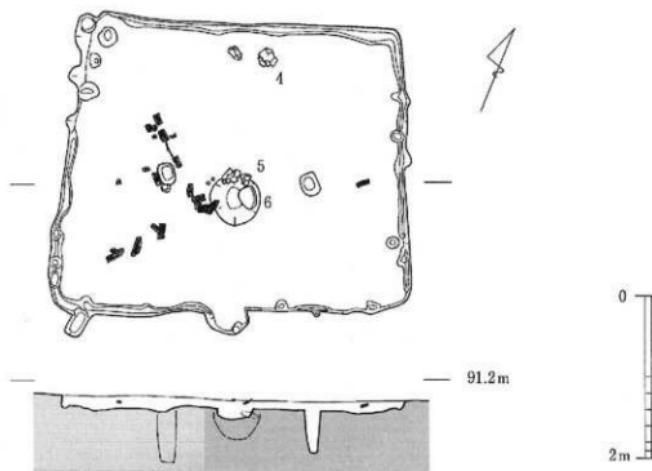
1003号竪穴住居跡（第7・8図）

30-60杭の西で検出された。3.7m×4.1mの方形竪穴で、検出面から床面までの深さは約30cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、アカホヤバミス、ブロックを含んでいる。特に下部ほど多く、貼床を施している状況がうかがえる。壁際にはごく浅い小ピットが数基認められる。主柱穴は2本で、いずれも柱の当たりが明瞭で、径20cm程の柱の使用が推定可能である。

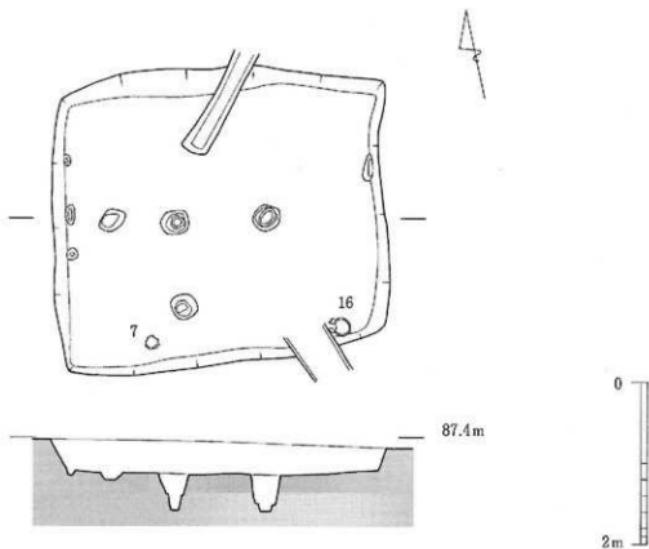
遺物は床面から15cm程上位で出土している。7～12は甕、13は二重口縁甕、14は長頸甕、15・16は鉢、17は小型器種の壺である。11は小形に属する甕である。13と14の口縁部外面には櫛描波状文が施される。14と17の外面にはミガキ調整が施される。



第5図 1001号竪穴住居跡 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第6図 1002号竪穴住居跡 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/6)



第7図 1003号竪穴住居跡 (1/60)

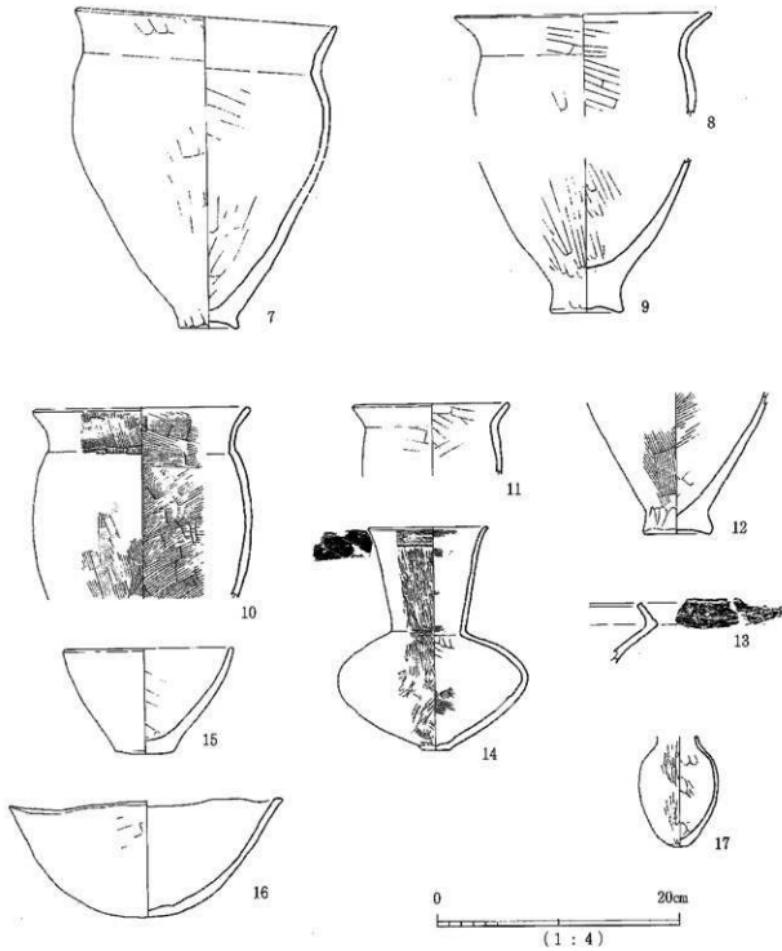
1004号竪穴住居跡 (第9図)

30-63区で検出された。一辺長約3.8mの正方形を呈する。検出面からの床面までの深さは約35cm。覆土は黒褐色土を基調とするが、最下部はアカホヤブロック、IV層土ブロックでつき固めた様子が観察できる。19などの完形土器もその貼床土の上端面で出土しており、そこが生活面であったと考えられる。主柱穴は2本確認できる。また西側コーナー近くに浅い凹部が見られる。

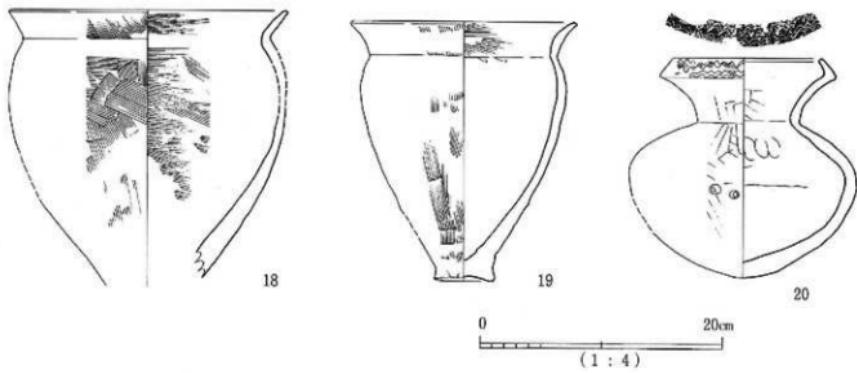
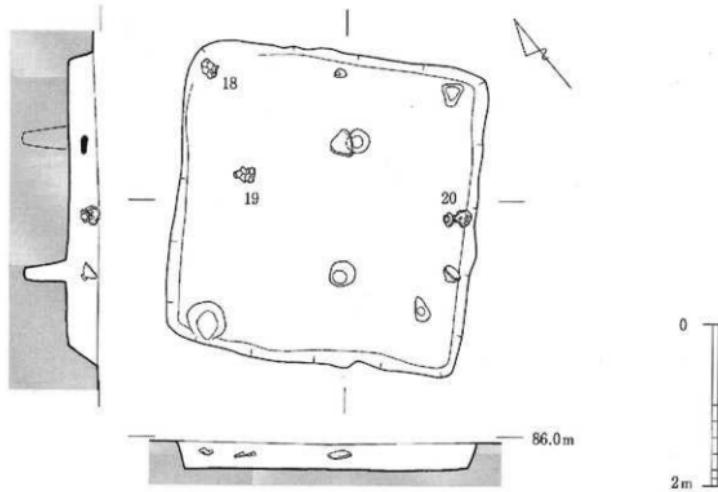
遺物はほぼ同一レベルで出土しており、前述の通りそのレベルが生活面と見られる。甕(18・19)、二重口縁壺(20)などの土器のほか、扁平碟が1点、北東側の柱穴近くより出土している。

1005号竪穴住居跡 (第10・11図)

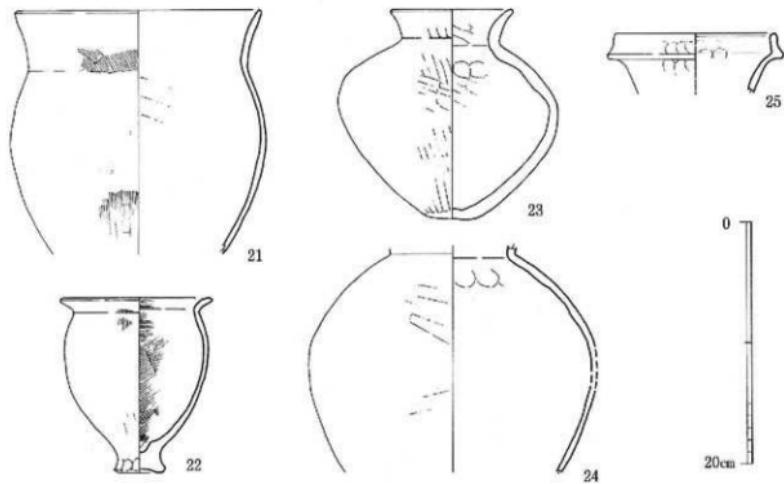
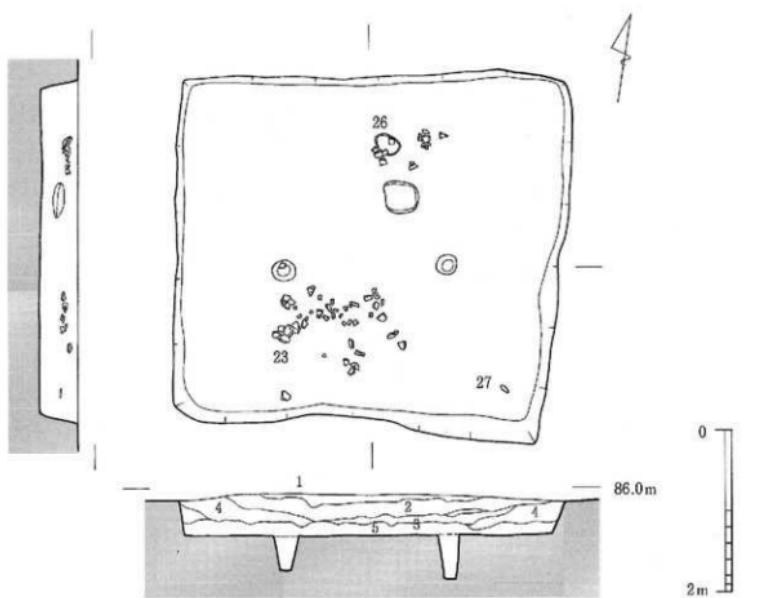
30-64杭の西側で検出された。平面規模は4.3m×4.7m、検出面から床面までの深さは約50cmを測る。覆土は岡中1・2など上部では黄褐色を呈し、3・4は黒褐色となる。5はアカホヤブロックを多く含む貼床土と見られるものである。遺物は貼床上端面よりも上位のレベルで出土している。主柱穴は2本確認できる。出土土器は甕(21・22)、壺(23~26)など。25は粗い造りの二重口縁壺で、指頭つまみの痕跡が残る。また石包丁(27)も出土している。さらに、岡化していないが扁平碟も見られた。



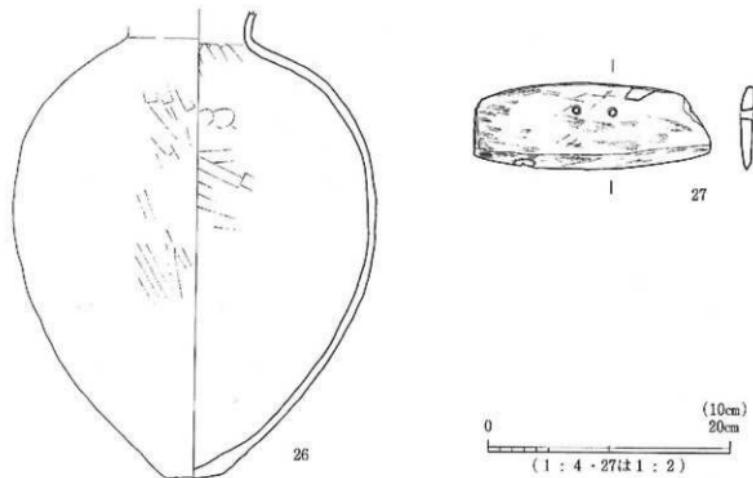
第8図 1003号竪穴住居跡出土遺物 (1/4)



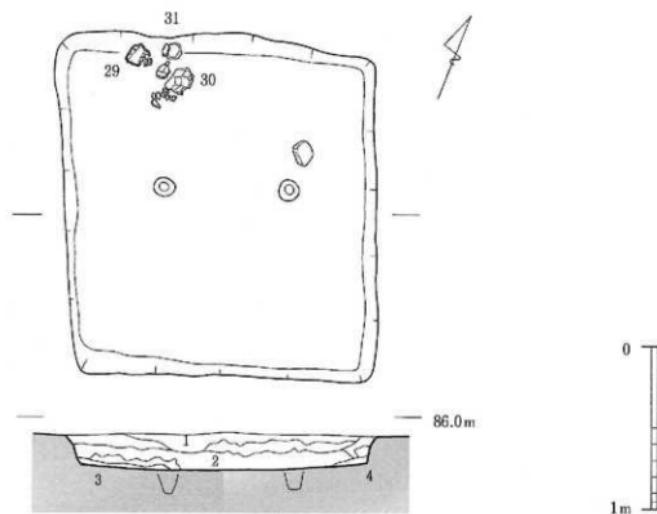
第9図 1004号竪穴住居跡（1/60）・出土遺物（1/4）



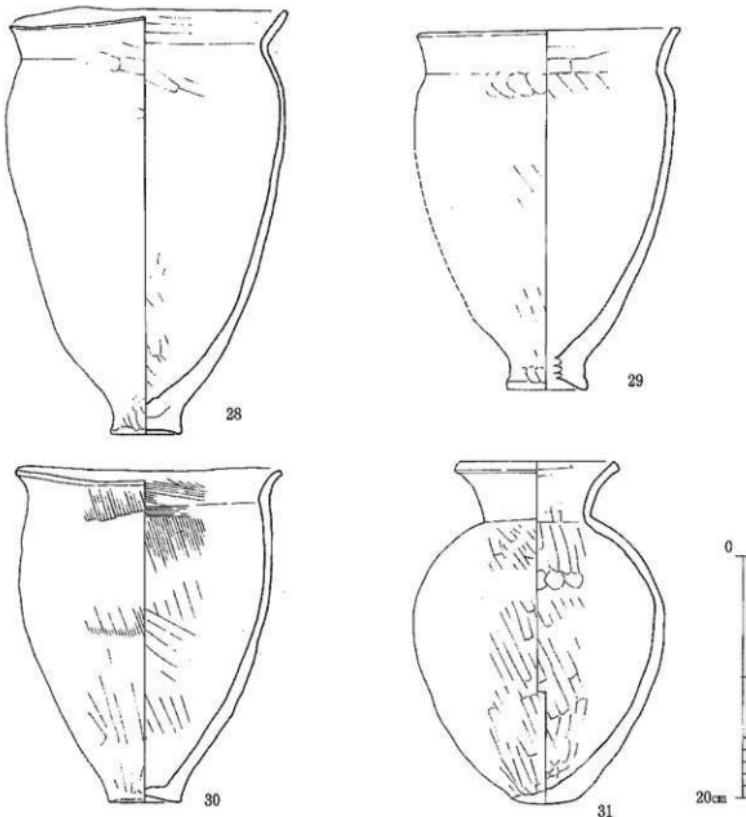
第10図 1005号竪穴住居跡 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第11図 1005号竪穴住居跡出土遺物 (2) (1/4・27は1/2)



第12図 1006号住居跡竪穴 (1/80)



第13図 1006号竪穴住居跡出土遺物 (1/4)

1006号竪穴住居跡 (第12・13図)

1005号竪穴住居跡の東にある。平面規模は4.2m×3.8m、検出面から床面までの深さは約45cm。覆土は黄褐色を呈し、下部(図中2)はアカホヤバミス、ブロックを多く含む。遺物はほぼ2の上面より出土している。主柱穴は2本確認できる。

壺(28~30)、壺(31)などの土器の他、扁平碟が1点出土している。

壺はいずれも口縁部が外反するもので、底部はわずかに上げ底となる。壺は倒卵形の体部をなし、凸レンズ状の安定しない平底となる。扁平壺は該期の豊穴住居跡の多くに見られるもので、肩面を有し、敲打痕が認められる個体があることから、作業台のような用途を想定しておきたい。

(2) 「土器埋納遺構」(第14・15図)

30・31-57~59区に自然地形の陥没孔があり、そこから古墳時代前期の土器が一括出土している。この陥没孔は、3号埴谷と5号埴谷の頂部を結んだ線上にある。伏流水の通り道が陥没したものと見られ、それ 자체はシラス台地上にしばしば見られる「水穴」であろう。

断面図を観察すると、Ⅲ層（アカホヤ層・網掛け部）とⅣ層が落盤していることや、その落ち際に樹根の痕跡があること、最下層の黒色粘質土（15）の上位に広葉樹の腐植化土と見られる黄褐色土層（12）が形成されていること、などの特徴を指摘することができる。そして15の上面に、土器が「埋納」と表現可能な状態で遺存していた。

以上の点から、この自然地形と「埋納遺構」は、次のような段階を経て成立したと推測した。

まず、鬼界カルデラが噴火し、当地域にアカホヤ火山灰が降下した後、もともと緩やかな凹部であった当該箇所が陥没して「水穴」が形成される。この陥没が、鬼界カルデラの噴火以前に起きた可能性もあるが、アカホヤ火山灰が陥没箇所の底面にきれいな層を成して堆積していることから、アカホヤ層形成以後に陥没が起きたとすべきであろう。

そして、おそらく陥没孔の落ち際に、樹木が繁茂したのである。陥没孔底面は、水分の多いところであったと見られる。「埋納遺構」が形成されたのは、まさにその頃であり、落ち際に中心に土器が安置される。

その後、陥没孔は徐々に埋まっていき、高原スコリア堆積時（古代）には、ほとんど埋没している。先に触れた黄褐色土層（12）には土器片が多量包含されているが、いずれもまとまりのない破片で、流れ込んだものと判断される。さらに下って近世には硬化面を伴う5号溝が当所を通っている。

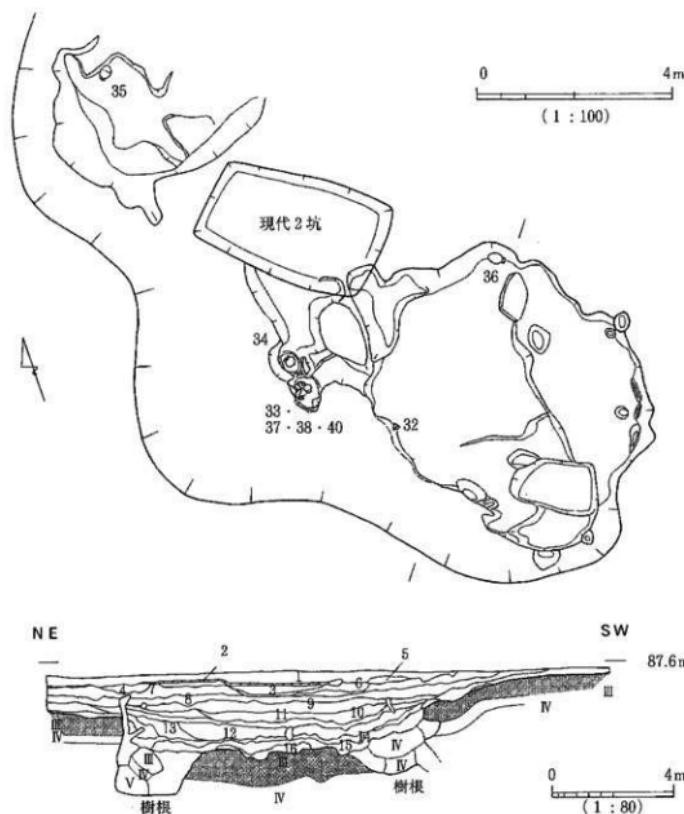
以上がこの「埋納遺構」の特徴とその解釈である。繰り返すが、この落ち込み自体は人為的なものではなく、出土土器も投棄された状態ではなく、置かれたと見るべきである。こういった在り方を表現するとき、現状では「祭祀」という用語でくらざるを得ないのである。当所は伏流水の通り道で、樹木が繁茂するところであった。そういう情景の復元が妥当であれば、「水」「水源」への祀りといった事象が推測されるであろう。

出土土器はいずれもほぼ完全な状態で遺存している。

32~34は壺である。32は小形の壺で、口縁部にはタタキ痕が残る。プロポーションは在地壺の特徴を示している。33は球形胴となるが、胎土、調整は在地土器のそれと変わることろがなく、34の壺の影響を受けて成立したものと見るべきであろう。34は外來系（布留式系壺）で、胎土の特徴や、薄手の造り、細かいハケ目、内面のケズリ調整などの諸特徴から、輸入品と判断されるものである。球形の器形を呈し、肩部に沈線が1条水平に巡る。口縁部はわずかに肥厚し、口唇部を内側に拡張させ、平坦面を形成する。

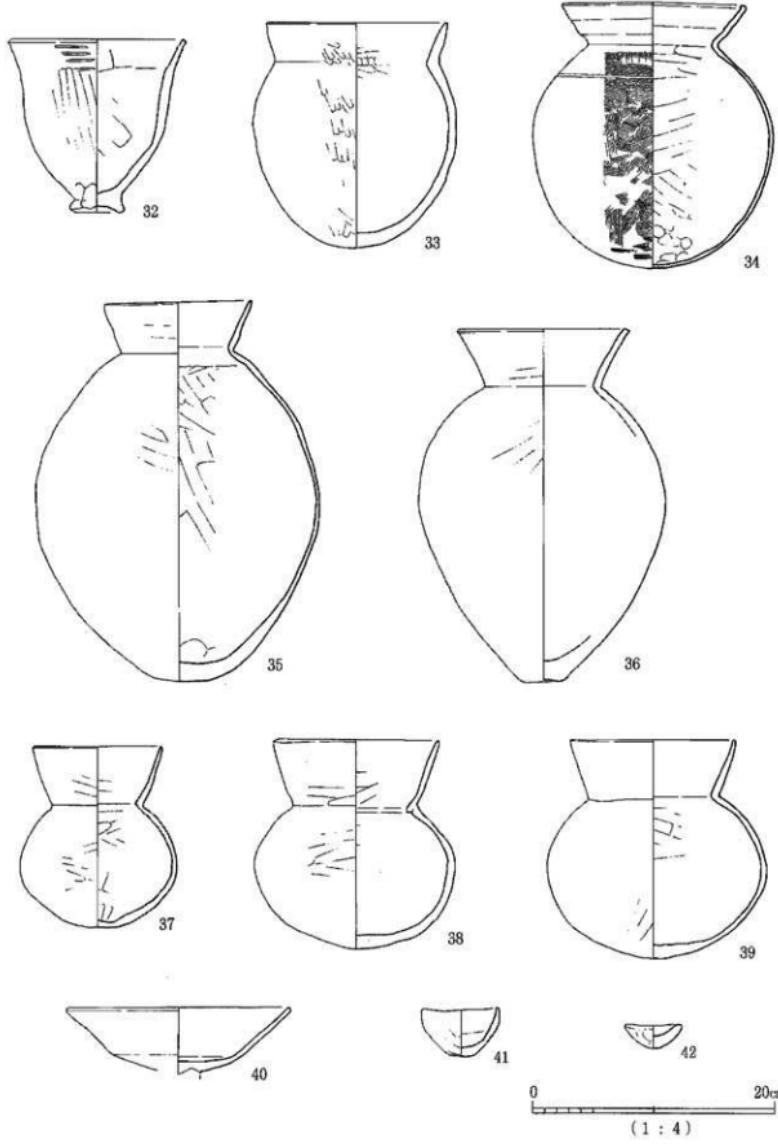
35~39は壺で、35と36は直に聞く口縁を有する。36は小さな平底となる。37~39はほぼ同一のプロポーションを有する。

40は高杯の杯部で、脚部との接合面が良好に残る。41と42は小型の粗製鉢・碗である。



- 土層注記**
- 1 黒褐小礫含む Ia層に似る。
 - 2 にぶい黄褐色 火山灰土 霧島山系か。
 - 3 5号溝覆土 暗灰黃、かたく、鉄分の凝聚も。道路跡か。
 - 4 黒褐、小礫含み、ザラザラ
 - 5 黒、桜島文明ボラ、高原スコリアバミス含む、やわらかい。
 - 6 黒色土中に文明ボラバミス少叢含む。
 - 7 黒褐、高原スコリアバミス多く含む。
 - 8 暗黄褐色、高原スコリアバミス多く含む。
断面はザラザラ。
 - 9 8より黒味強い。
 - 10 黒褐 オレンジ色バミス多く含む。
 - 11 暗灰黃 10と12の漸移層まだら。
 - 12 黄褐色 シルト質、土器を包含
広葉樹の腐植化上か。
 - 13 12より黒味強い。
 - 14 12と15の漸移層
 - 15 黒、粘性大、アカホヤバミス含む。
 - 16 黒褐、アカホヤバミス、ブロック多く含む。
「埋納」土器はこの層の上面より。

第14図 「土器埋納」遺構 (1/100)



第15図 「土器埋納」遺構出土遺物 (1/4)

第1表 土出土器観察表 (1)

遺物 番号	器種別	器 種 名	出 し 場 所	測 量 点	法 長 口 径 底 径 器 高	外 面 内 面	手法・開度・文様ほか	色 調	断面の特徴		備考
									外 面	内 面	
1	弥生 土師器	口縁～底部	SA 1001	15.6	5.9	16.1	ハケ	ナデ	灰	にぶい銀	3mm以下の小細孔、薄色・黒色の粒
2	弥生 土師器	身	SA 1001	10.1	1.8	8.4	ミガキ	ミガキ	灰	にぶい銀質	4mm以下の灰色の粒
4	弥生 土師器	口縁～底部下	SA 1002	(12.0)	—	—	ナデ	ナデ、ハケ	灰	にぶい銀質	半丸、 浅造形
5	弥生 土師器	口縁～底部	SA 1002	(5.8)	(4.2)	18.7	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	灰	にぶい銀質	2mm以下の灰・灰白の粒
7	弥生 土師器	口縁～底部	SA 1003	21.3	4.9	26.4	ナデ	ナデ	灰	にぶい銀質	2mm以下の灰・灰白の粒
8	弥生 土師器	口縁	SA 1003	(20.6)	—	—	ナデ	ナデ	灰	にぶい銀質	2mm以下の灰・灰白の粒
9	弥生 土師器	底部	SA 1003	—	(5.8)	—	ナデ	ナデ	灰	にぶい銀質	2mm以下の灰・灰白の粒
10	弥生 土師器	口縁～底部	SA 1003	(17.2)	—	—	ナデ、ハケ	ハケ	浅黄	にぶい銀質	スス付番
11	弥生 土師器	口縁	SA 1003	(12.4)	—	—	ナデ	ナデ	灰	の粒	4mm以下の灰・灰白・灰白色の粒
12	弥生 土師器	底部	SA 1003	—	5.6	—	ナデ	ナデ	灰	にぶい銀質	3.5mm以下の茶褐色・墨色・灰褐色・ 灰色の粒、透明光沢
13	弥生 土師器	口縁	SA 1003	—	—	—	ナデ	ナデ	灰	にぶい銀質	3ex以下の茶系・墨色・赤茶色の 粒
14	弥生 土師器	口縁～底部	SA 1003	(9.5)	2.4	18.3	ミガキ	ハケ	灰	にぶい銀質	2.5mm以下の少褐色・灰白色の粒、 黑色光沢粒、透明光沢
15	弥生 土師器	口縁	SA 1003	(13.6)	4.8	8.8	ナデ	ナデ	灰	にぶい銀質	3ex以下の少褐色・灰白色の 粒
16	弥生 土師器	口縁～底部	SA 1003	22.0	—	9.5	ナデ	ナデ	灰	にぶい銀質	4mm以下の茶褐色・灰褐色・黒色 色の粒
17	弥生 土師器	口縁	SA 1003	—	1.3	—	ミガキ	ナデ	灰	にぶい銀質	黒斑
18	弥生 土師器	口縁～底部	SA 1003	22.5	—	—	ハケ	ハケ	灰	改質板 灰	4mm以下の茶褐色・灰白色・黒色 の粒
19	弥生 土師器	口縁	SA 1004	(18.0)	4.9	21.3	ハケ	ハケ、ナデ	灰	にぶい銀質	6mm以下の茶褐色・灰白色・黒色の 粒
20	弥生 土師器	口縁～底部	SA 1004	12.2	—	19.0	ナデ	ナデ	灰	にぶい銀質	3ex以下の褐色・灰色・黑色の粒、 黑色光沢
21	弥生 土師器	口縁～底部	SA 1004	(19.8)	—	—	ハケ、ナデ	ナデ	灰	にぶい銀質	2.5mm以下の黒色・褐色の粒、黑色 光沢
22	弥生 土師器	口縁～底部	SA 1005	(11.5)	3.7	14.4	ハケ、ナデ	ハケ	灰	にぶい銀質	4mm以下の茶褐色・灰褐色・黒色 色の粒
23	弥生 土師器	口縁	SA 1005	9.8	3.9	17.2	ナデ	ナデ	灰	改質板 灰	黒斑
24	弥生 土師器	口縁～底部	SA 1005	—	—	—	ナデ	ナデ	灰	にぶい銀質	4mm以下の茶褐色・灰白色・黒色の 粒
25	弥生 土師器	口縁	SA 1005	(12.9)	—	—	ナデ	ナデ	灰	にぶい銀質	3ex以下の褐色・灰白色の粒
26	弥生 土師器	口縁～底部	SA 1005	—	4.6	—	ナデ	ナデ	灰	にぶい銀質	2mm以下の茶褐色・灰褐色の粒
27	弥生 土師器	口縁	SA 1006	(22.2)	(5.6)	34.7	ナデ	ナデ	灰	明黄 灰	黒斑
29	弥生 土師器	口縁～底部	SA 1006	21.5	6.5	29.4	ナデ	ナデ	灰	にぶい銀質	5mm以下の茶褐色・灰褐色・ 黑色の粒
30	弥生 土師器	口縁	SA 1006	21.6	5.8	27.2	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	灰	内質板 灰	3mm以下の茶褐色・灰褐色・ 黑色の粒
31	弥生 土師器	口縁	SA 1006	(12.5)	5.6	28.3	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	灰	内質板 灰	4mm以下の茶褐色・灰褐色・ 黑色の粒
32	弥生 土師器	口縁～底部	SX 1	(14.0)	3.8	14.2	タタキ、ハケ	ハケ、ナデ	浅黄	浅黄板 灰	3mm以下の茶褐色・ 黑色の粒
33	弥生 土師器	口縁～底部	SX 1	(14.6)	—	18.5	ナデ	ナデ	灰	にぶい銀質	5mm以下の茶褐色・ 黑色の粒
34	弥生 土師器	口縁～底部	SX 1	14.9	—	21.8	ハケ、灰	ナデ、ケズリ	灰	にぶい銀質	4mm以下の茶褐色・ 黑色の粒
35	弥生 土師器	口縁～底部	SX 1	12.8	4.7	31.5	ナデ	ナデ	灰	内質板 灰	2mm以下の茶褐色・灰褐色の粒、 黑色光沢
36	弥生 土師器	口縁～底部	SX 1	13.2	3.4	29.3	ナデ	ナデ	灰	内質板 灰	5mm以下の茶褐色・ 黑色の粒
37	弥生 土師器	口縁～底部	SX 1	10.7	—	14.8	ナデ	ナデ	赤	内質板 灰	スス付番
38	弥生 土師器	口縁～底部	SX 1	13.5	—	17.2	ナデ	ナデ	黄	内質板 灰	4mm以下の茶褐色・ 黑色の粒
39	弥生 土師器	口縁～底部	SX 1	13.5	—	18.0	ナデ	ナデ	黄	内質板 灰	5mm以下の茶褐色・ 黑色の粒
40	弥生 土師器	口縁～底部	SX 1	18.5	—	—	ナデ、ミガキ	ナデ	黄	内質板 灰	4mm以下の茶褐色・ 黑色の粒
41	弥生 土師器	口縁～底部	SX 1	(6.2)	2.1	3.9	ナデ	ナデ	黄	内質板 灰	2mm以下の茶褐色・ 黑色の粒
42	弥生 土師器	口縁～底部	SX 1	(4.8)	—	2.0	ナデ	ナデ	黄	内質板 灰	2mm以下の茶褐色・ 黑色の粒

3 Ⅲ層上面検出の遺構・遺物（縄文時代）

当遺跡では縄文時代中期から晩期の遺構・遺物が確認されているが、第2遺跡で集落跡が検出された後前期葉～中葉の時期については遺物がごく少量出土したのみである。

中期に属する竪穴・上坑は、調査地南西～南側に、帯状に分布している。覆土はI c 層土を基調とする。それらの南側は標高が下がることから、台地の端部近くに形成された集落と位置づけることができようが、細かくは1号～7号竪穴の一群、8号～16号竪穴の一群、18号～29号竪穴の一群という3つのグループに分けられる。

一方、晩期に属する土坑が、調査地北側（25～27号土坑）や北東側（60～64号土坑）で検出された。円形を呈する土坑がほとんどで、断面形が台形状になるものもある。

調査地中央部については、検出された小穴の数は少くないが、不整形で性格不明な落ち込みがほとんどで、遺構の密度は低いと表現しても良いであろう。

（1）竪穴

1号竪穴（第16図）

43-48区で検出された円形竪穴。径は3.2m～3.4m、検出面から床面までの深さは約25cmで、床面中央部がさらに8cm程度低くなる。壁際および床面上に小ピットが認められた。

遺物は土器小破片、自然礫が出土しているのみで、所属時期は明確にし得ないが、2号竪穴と構造が似通っており、中期中葉の竪穴（住居か）と推測される。

2号竪穴（第16・30図）

1号竪穴の南西にある円形竪穴。径は2.8m～3.1m、検出面から床面までの深さは約25cmを測る。床面の北側がさらに35cm程度掘り凹められている。南西側は後の時代の土坑に切られる。主柱穴は北西と南東にある2基か（いずれも床面からの深さ約40cm）。

図化した遺物43は、口縁端部が内湾するもので、外面上には押引状の連点文を施す。

3号竪穴（第16図）

2号竪穴の南西に位置する。円形基調の竪穴であろうが、北西側は土坑との重なり（先後関係不明）で、南側は削平の影響で、形状が判りにくくなっている。床面上にはピットが数基認められるが、柱穴配置は不明である。東側の壁面は緩やかに立ち上がりっている。

遺物は土器の小破片が少量と、石皿様の扁平砾が1点認められた。

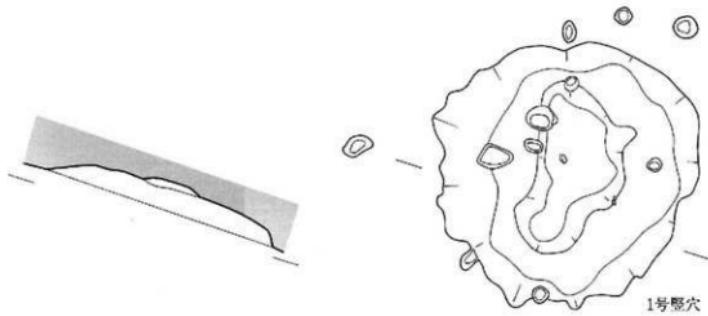
4号竪穴（第17・30図）

4号・5号・7号竪穴は近接している。4号竪穴はそれら3基の中央に位置する。ただし検出時には確認できなかったが、少なくとも2基の竪穴が重なっているようである。新期の竪穴（4B号竪穴とする）の床面には凹部が認められる。図化した遺物のうち、44・48は4B号、46・47は4号竪穴出土。

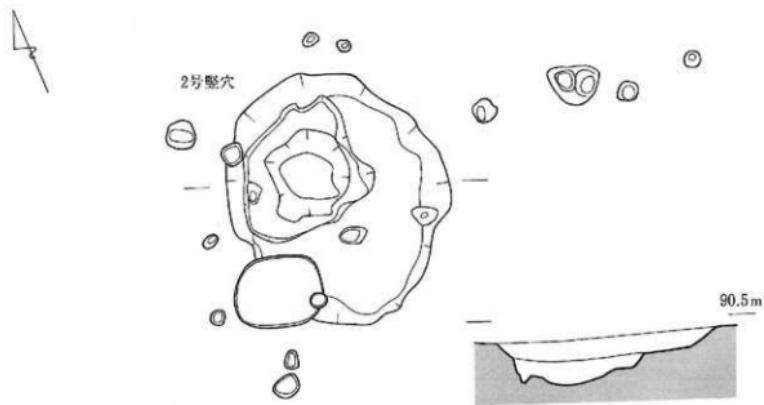
44は口縁部をわずかに肥厚させ、その外・内面に沈線文を施す。45は外面上に斜格子状の浅い条痕文を、内面上に相交弧文を施す。46は外・内面ともに条痕のみ残る。47は扁平砾使用の石皿。ただし明瞭な凹部は認められない。48は凝灰岩製の砾石器で、片面に擦り切り溝がある。

5号竪穴（第17・30図）

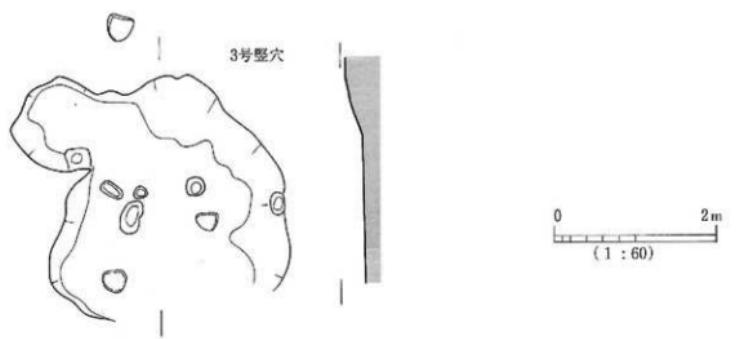
橋円形の竪穴と見られるが、北側はおそらく別の土坑と重なっているのである。東側には14号土坑が築かれているが、それとの間にさらに1基、竪穴か土坑が存在していた可能性がある。



1号竖穴



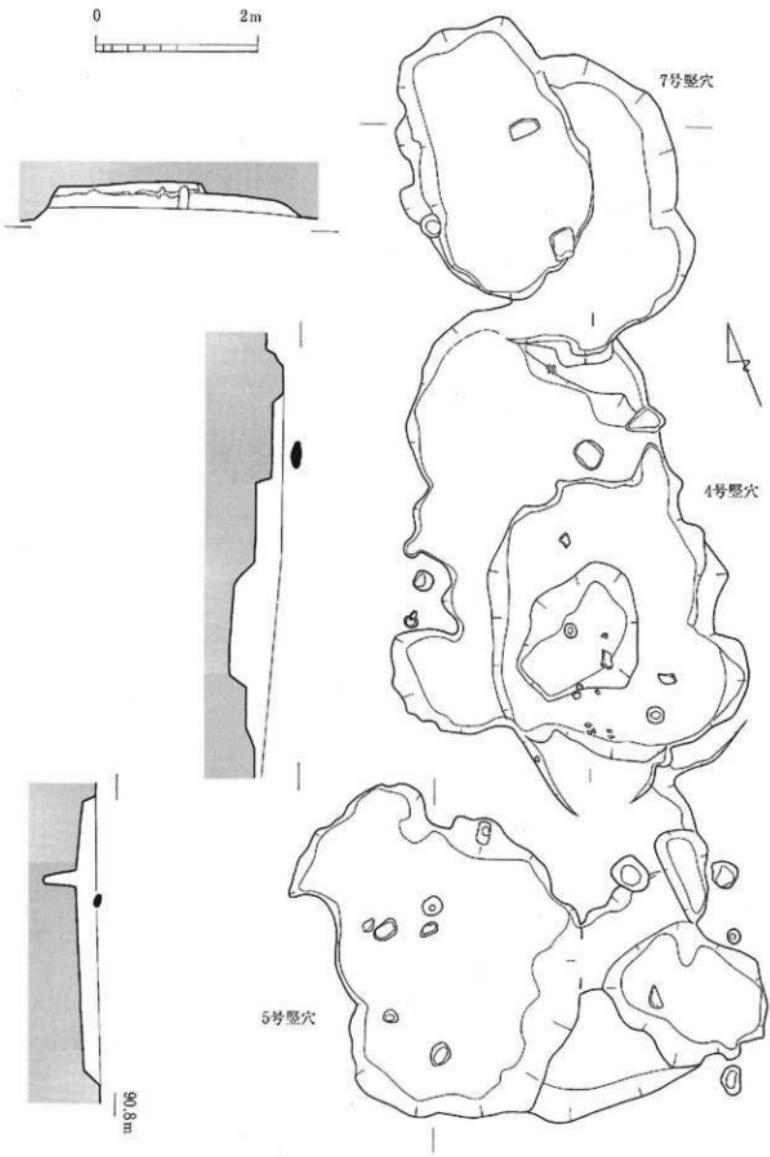
2号竖穴



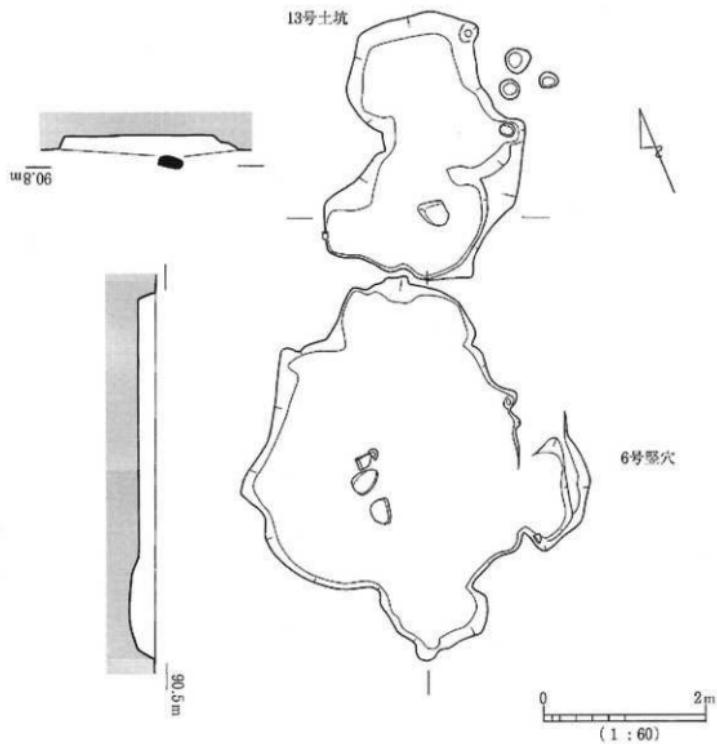
3号竖穴

0 2m
(1 : 60)

第16図 1号・2号・3号竖穴 (1 / 60)



第17図 4号・5号・7号竪穴 (1/60)



第18図 6号竪穴・13号土坑 (1/60)

長軸長は3.7m、短軸長は3.0m、検出面から床面までの深さは約30cmを測る。

少量の土器片と石器(49・50)が出土している。石器は検出面近くのレベルにあった。

7号竪穴(第18・31図)

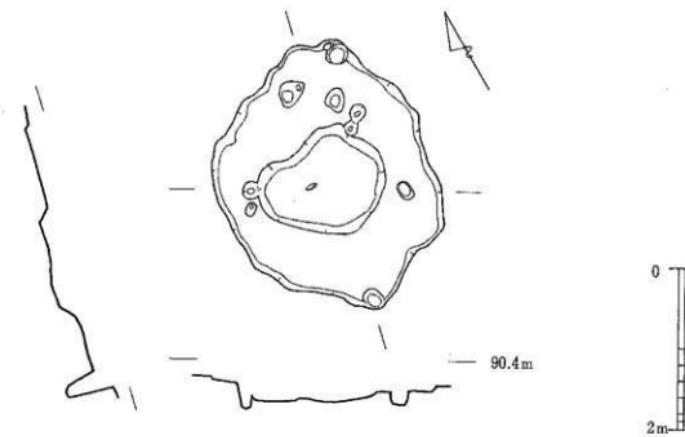
2つの竪穴が重なっており、旧期の竪穴は4号竪穴に切られる。新期の竪穴(7B号竪穴)は3.4m×2.1mの楕円形を呈する。図化した石器(55)は7B号竪穴出土。

6号竪穴(第18・31図)

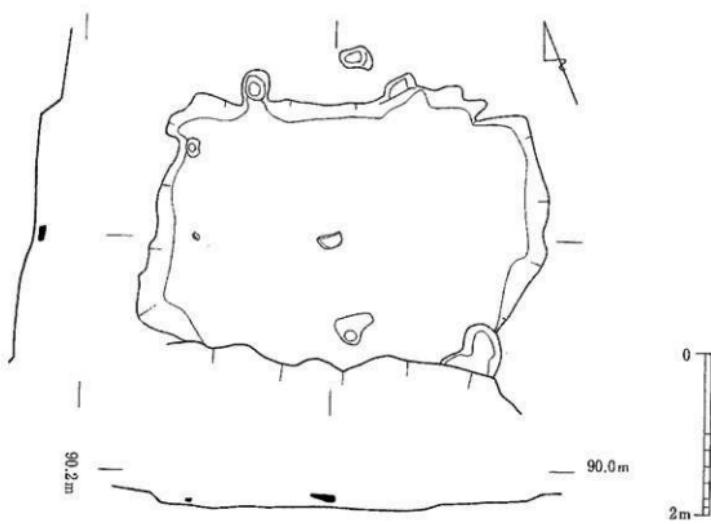
4号竪穴の北西隣で検出された楕円形竪穴。北隣には13号土坑がある。南および南東側に土坑が重なっている。中央部に52・53などの遺物が見られた。51の土器は平行沈線文を施すものである。

8号竪穴(第19図)

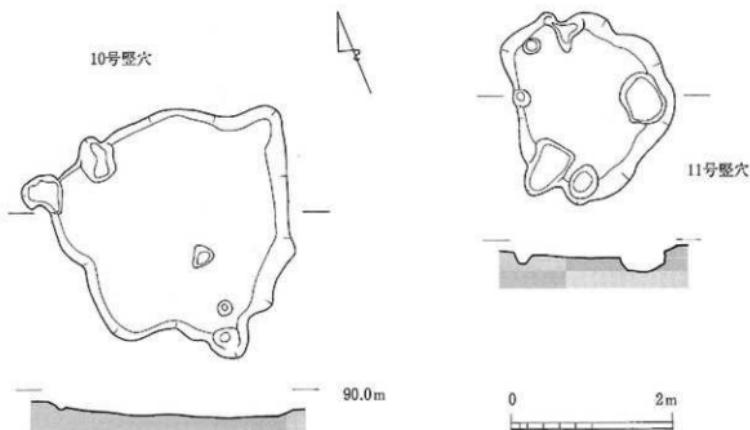
44・45-50区で検出された楕円形の竪穴。床面中央部に土坑を有する。壁際や床面にいくつかのピットがあるが、主柱穴は特定できない。遺物は土器片が少量出土したのみである。



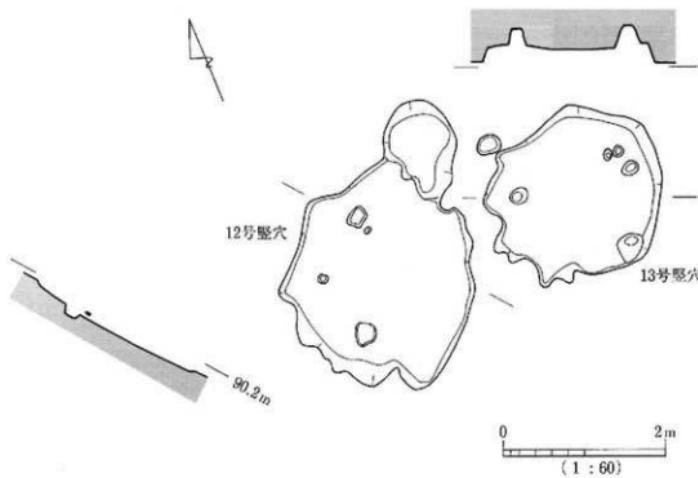
第19図 8号整穴 (1/60)



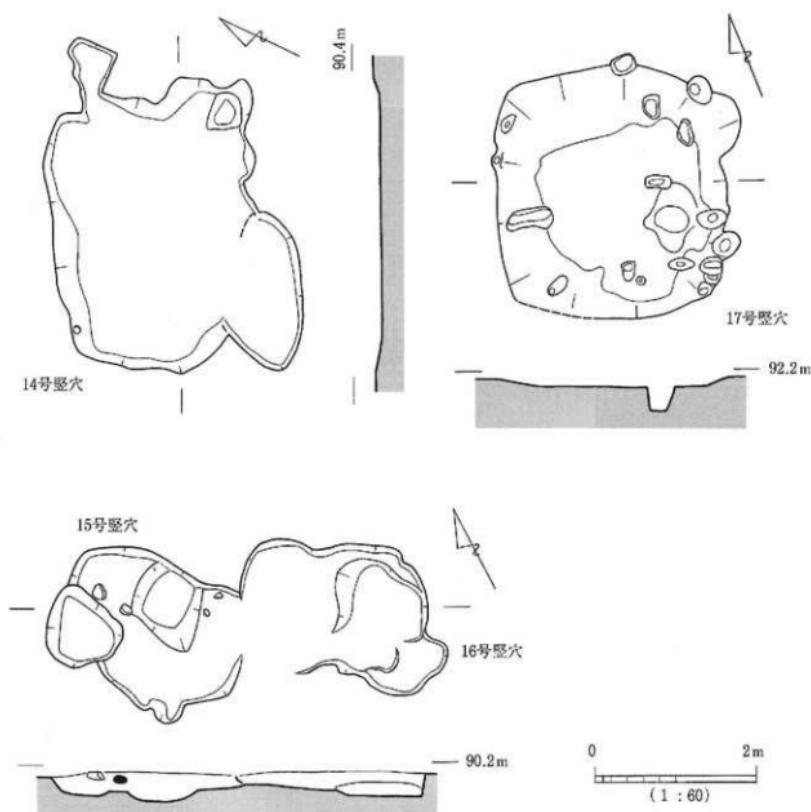
第20図 9号整穴



第21図 10号・11号竪穴 (1/60)



第22図 12号・13号竪穴 (1/60)



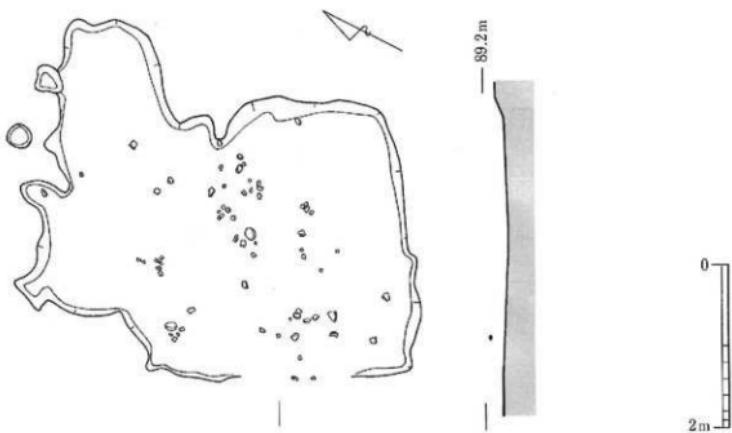
第23図 14号・15号・16号・17号竪穴 (1/60)

9号竪穴 (第20・31図)

45-50区にある方形竪穴。南側は段落ちとなり、その影響からか南側では床面レベルが下がっている。東西方向の一辺長は4.8mと比較的の規模が大きい。主柱穴は不明。床面中央付近に扁平砾使用の石皿(58)が見られた。また口縁端部がわずかに内湾し、そこに突堤を付す土器(56)などが出土している。

10号竪穴 (第21図)

45-51区で検出された。やや不整であるが方形を呈する竪穴か。一辺長は2.9m、検出面からの深さは約25cm。主柱穴は不明。遺物は土器の小破片のみであった。



第24図 18号竪穴 (1/60)

11号竪穴 (第21図)

10号竪穴の東にある。円形基調の竪穴か。南西側と東側は後の時代の土坑に切られる。径は2.0m～2.3m、検出面からの深さは約25cm。遺物は土器小破片のみであった。

12号竪穴 (第22図)

44-51区で検出された。北東側は後の時代の土坑に切られており、平面プランは明確にし得ない。主柱穴も不明。遺物はごく少量の土器片と扁平碟（石皿か）、円碟のみであった。床面からやや浮いた位置で出土している。

13号竪穴 (第22図)

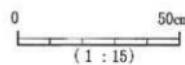
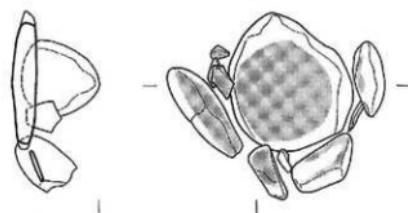
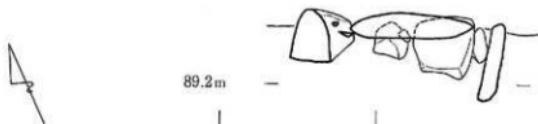
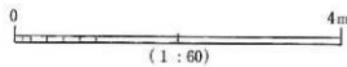
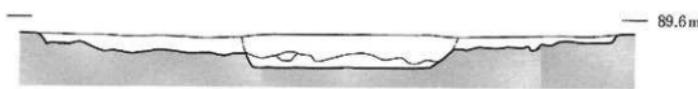
12号竪穴の東隣に位置する円形竪穴。径は2.1m、検出面からの深さは約30cm。床面に主柱穴らしきピットが2基認められる。遺物は土器片がごく少量出土したのみであった。

14号竪穴 (第23図)

43-44-51区にある。3.6m×2.5mの長方形を呈するものと見られるが、南西側は後の時代の土坑構築により影響を受ける。検出面からの深さはきわめて浅く、約8cm程である。遺物は土器片が少量見られたのみ。

15号竪穴 (第23・32図)

44-52区にある。検出時はある程度の広がりを持った落ち込みと判断されたが、掘り下げの結果、2.5m×1.7mの土坑とすべき遺構と判明した。ただし、竪穴の床面中央部の凹部であった可能性もある。西側は後の時代の土坑に切られている。床面中央北寄りのところに一段低い凹部がある。



第25図 21号整穴・35号土坑 (1/60)・石組炉 (1/15)

覆土中より土器片（59・60）、石器（61）などの遺物が出土している。59は口縁端部を屈曲させ、突起を付し、そこに貝殻原体による压痕文を施す。61は碟の長軸上の端部に敲打痕が認められる。

16号竪穴（第23図）

15号竪穴と同規模の遺構で、やや不明瞭ながら15号竪穴を切っているようである。床面は南側が一段低くなる。出土遺物は土器の小破片がほとんどであった。

17号竪穴（第23図）

調査地西端の36-46区で検出された。他の竪穴の集中箇所からは離れた位置にある。3.1m×2.8mの方形を呈する。検出面からの深さは約15cmと浅く、壁面の立ち上がりは緩やかである。壁面および床面にはいくつかのピットがあるが、いずれもしっかりしたものではなく、柱穴位置は不明となっている。出土遺物はごく少量の土器片のみで、所属時期は判然としない。

18号竪穴（第24・32図）

18号～29号竪穴は調査地南側付近で集中して検出された。それらは検出時に番号を付したが、19号・20号・26号・29号は、著しく不整形であり、竪穴かどうか疑わしい。ただし掘り下げる結果、土坑状となつた19号・20号などは、竪穴の床面中央部の凹部である可能性も残る。また、いずれの「竪穴」からも遺物は若干量出土しており、混乱を避けるため、番号の付け替えは行わなかった。

18号竪穴は、集中箇所のほぼ中央に位置する。方形基調の竪穴で、北側は他の土坑と重なり合っている。一边長は3.5m、検出面からの深さは約15cm。

遺物は土器片が比較的多量、覆土中より出土している。62～68がそれで、65を除いて同一型式に属すると見られる。62は屈曲し、内湾する口縁部外縫を文様帶とし、沈線による連続菱形モチーフの文様を描く。部分的に沈線が鉢底状となる点が特徴的である。67は口縁部を肥厚させている。

同じ第32図に掲載した19号竪穴出土土器（69・70）も同一型式に属するものである。

21号竪穴・35号土坑（第25・33・34図）

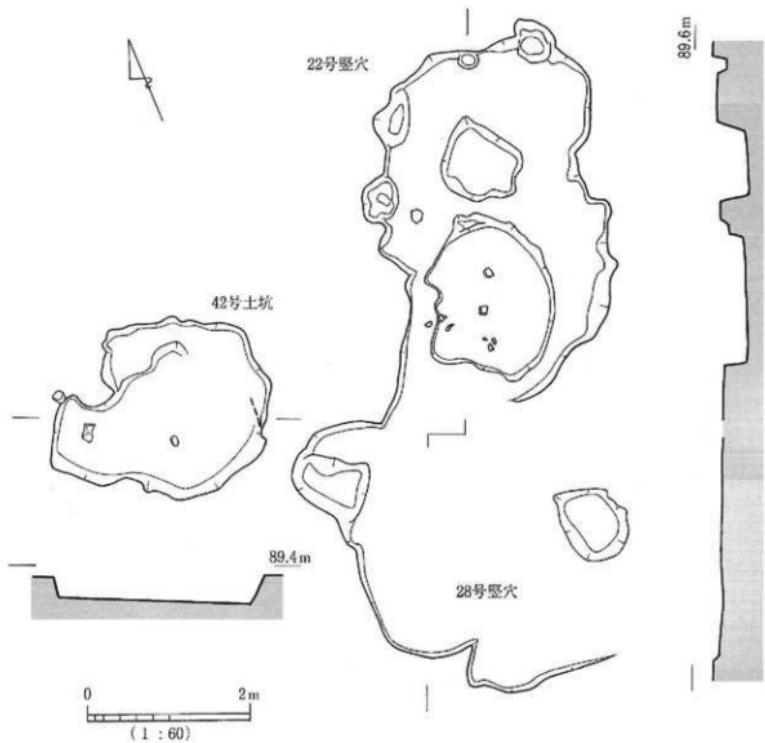
45・46・55区で検出された。重なり合いにより、個別の遺構の形状を把握することができなかつたが、3基の竪穴・土坑より成ると見るのが妥当か。ただし、21号竪穴とした遺構と35号土坑とした遺構の切り合い関係は、重要な意味を持つため精査を重ね、断面観察を繰り返したにもかかわらず、明確にし得なかつた。図示した層位図では21号竪穴が35号土坑を切るように表現されているが、黒褐色を呈する覆土の特徴が酷似しており、断定はできない。21号竪穴が張り出し部を伴う構造であった可能性についても充分考慮されるべきである。別の遺構であったとすれば、構築時期が近接しているのであろう。

この遺構（群）より、屋内石組炉が検出され、石剣が出土している。

石組炉は南側壁寄りの位置にあり、1枚の扁平巨礎を敷き、その周り三方に碟を立てかけて構成される。立てかけた碟の下底部は、V層土の再堆積土（炭化物混入）中に差し込まれており、碟を据え付けるため、いったん地山を掘り込んだのである。碟は部分的に赤変している（網掛け部）。

石剣（79）は35号土坑とした部分の、床面から20cm程上位の覆土中より出土している。緑泥片岩製で、頭部付近のみ残る。表面は丁寧に磨かれている。頭頂部付近に2本の平行刻線と鋸歯状刻線を入れる。また表面に赤色顔料を塗布した跡が認められる。なお「樹立された」出土状況ではないように見受けられたが、調査精度の問題もあり、その可能性を全く否定するものではない。

遺構の時期比定の決め手となる土器は、72の口縁部片が唯一のものである。

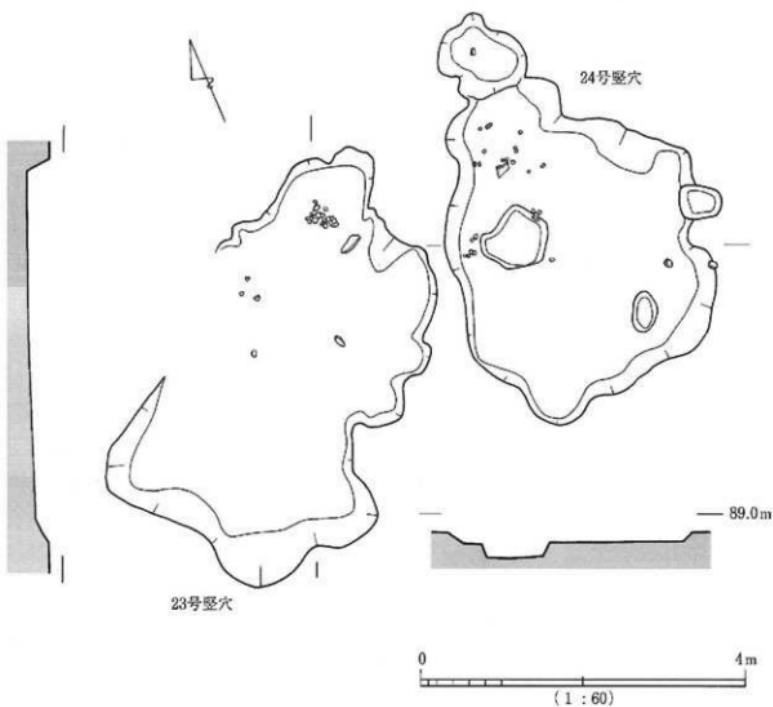


第26図 22号・28号竖穴 (1/60)

22号・28号竖穴 (第26・33図)

21号竖穴の南東に位置する。22号、28号と番号を付した2基の竖穴が切り合っているが、先後関係は不明。また22号竖穴の床面南側に2.1m×1.4mの椭円形の土坑があるが、そこは別の竖穴の床面である可能性も指摘できる。28号竖穴東側はプランがはっきりしない。22号竖穴の西には42号土坑があるがこれも複数の土坑が重なり合っている。

比較的まとまる土器片(75)、石斧(76)などが出土している。ただし75は南側の土坑内より出土している。口縁端部を内湾させ、口縁部外面に2列の平行する連点文(部分的に波状となる)を施す。



第27図 24号・25号竖穴 (1/60)

23号・24号竖穴 (第27図)

38-66杭付近にある。23号竖穴とした部分は2基の円形竖穴が重なり合っている可能性がある。24号竖穴は円形基調の竖穴（径約3.3m）と考えられるもので、北側は53号土坑に切られるほか、張り出し状になる部分も別の土坑と考えられる。床面中央やや西寄りのところに土坑が築かれる。

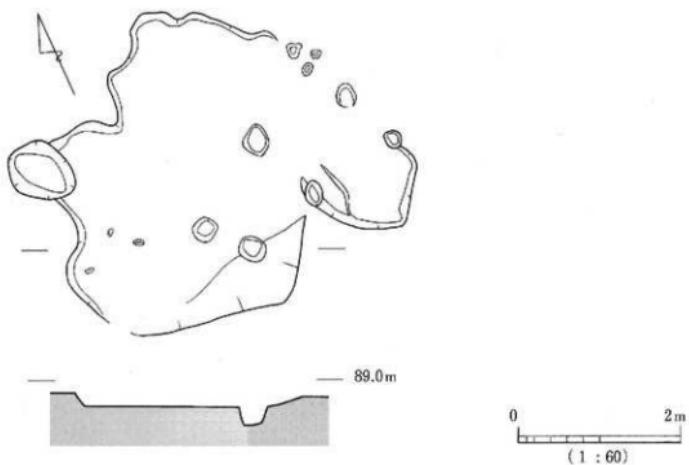
いずれの遺構からも土器片、自然礫が若干量出土している。

25号竖穴 (第28・33図)

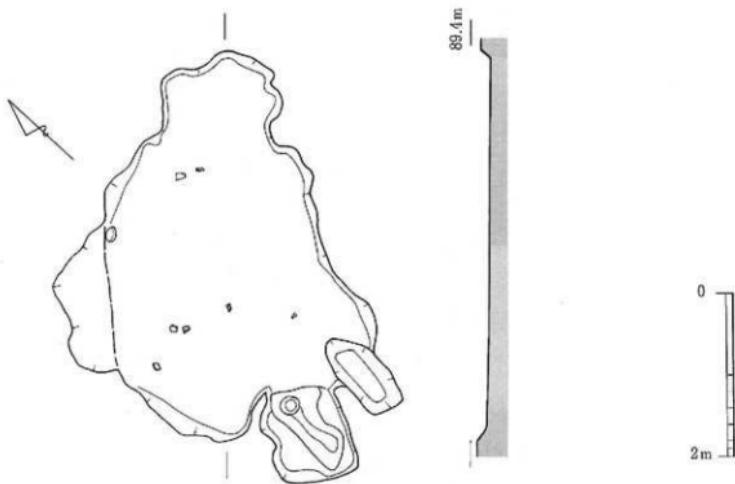
24号竖穴の北に位置する。不整形で、平面プランは判断できない。あるいは複数の竖穴・土坑が重なり合ったものか。土器片、切目石錘(77)など、若干量の遺物が出土している。

27号竖穴 (第29図)

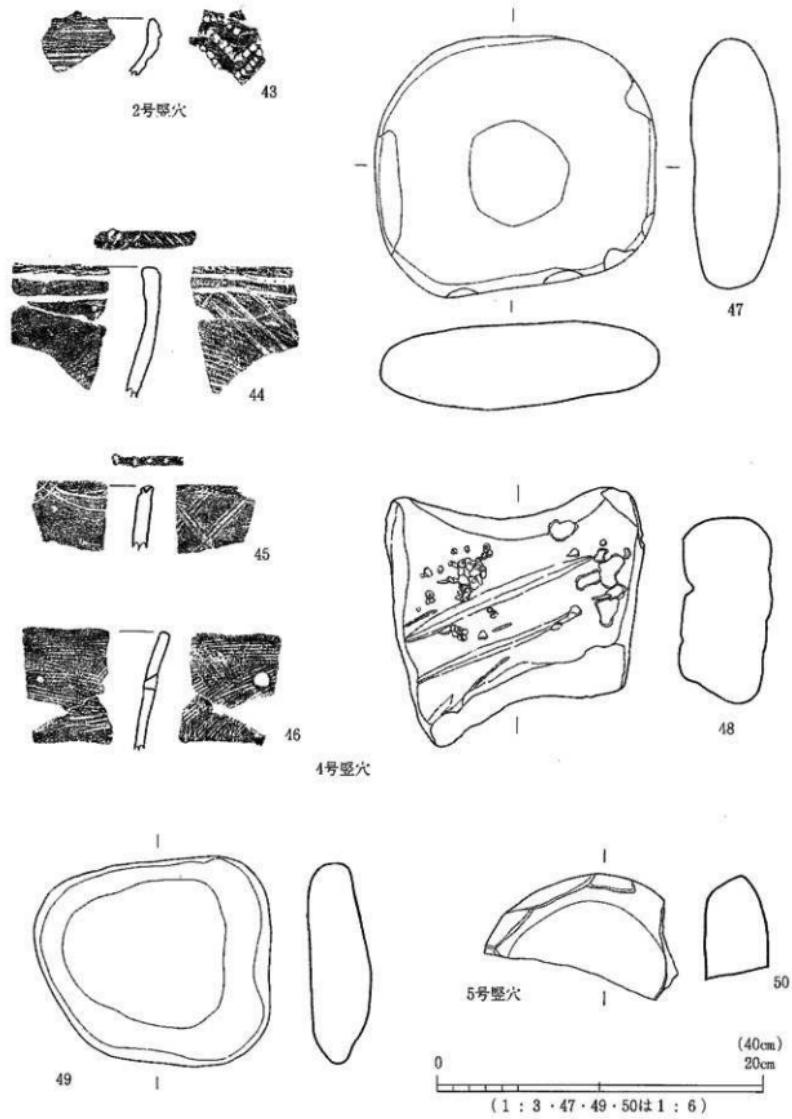
28号竖穴の南東に位置する。楕円形の竖穴と目されるが、いくつかの土坑と重なり合っているようである。扁平礫や若干量の土器片が出土している。



第28図 25号墳穴 (1/60)



第29図 27号墳穴 (1/60)



第30図 竪穴出土遺物 (1) (1/3 · 1/6)

29号竪穴（第33図）

27号竪穴の東に隣接するIc層の落ち込み。径は3.8m、検出面からの深さは約10cm程で、床面中央部に凹部が見られる。東半は円形を呈するが、西半は不整形となる。覆土中より78などの土器片が出土している。

（2）土坑

繩文土器の出土した総数68箇所の凹部に土坑の番号を付した。埋土はほとんどがIc層を基調とする褐色土である。ただし遺構との認定に疑問の残るものもある。

それらを分布よりいくつかの群にまとめるならば、①1号～10号土坑（1号埋没谷の東側に集中）、11号～13号土坑（1号～7号竪穴の周囲に分布）、②12号～14号、16～21号および30～32号土坑（8号～15号竪穴の周囲に分布）、③22号～24号土坑（17号竪穴の東に分布）、④25号～29号土坑（調査地北端付近に分布）、⑤33号～59号土坑（18号～29号竪穴付近に分布、不整形のものも多い）、⑥15号土坑など（調査地ほぼ中央に分布）、⑦60号～68号土坑（調査地北東端付近に分布）、となる。

それらのうち、③と⑥と⑦の二つのグループ以外は中期の所産と考えられるものである。

なお、紙数の都合により、ここでそれら全てについて説明することは不可能であるため、各群の中でも特徴的なもの、遺物の出土しているものに絞って取り上げていきたい。

1号・6号土坑（第35図）

1号埋没谷の東側（谷頂部）に計10基の落ち込みがあったが、自然の凹部であろう。うち1号・6号土坑より繩文時代中期に属する土器片が出土している（80・81）。なお、1号埋没谷の埋土にも該期の土器片が多数含まれていた。

12号土坑（第35図）

42-48区にある円形の土坑。径は0.8m～1.0m、検出面からの深さは約40cm。埋土中より土器片が少量出土している。83はキャリバー状を呈する個体の口縁部で、外面に2個単位の連点文を施すほか、拓影では判りにくいか突帯も付される。84は櫛目状の平行沈線文が施される。

13号土坑（第18・35図）

6号竪穴の北隣にある。2つの輪円形土坑が重なったものか。85など土器片が少量出土している。

15号土坑（第35図）

43-50区にある円形土坑。径は0.9m、検出面からの深さは約60cmで、検出面近くのレベルに礫や土器片の集積が認められた。土器は晩期に属するものである（86）。

23号土坑（第35図）

22号～24号土坑は、いずれも円形を呈するもので、22号・23号土坑は断面形が台形（いわゆるフ拉斯コ状）となる。87-88が埋土中より出土した土器で、晩期に属するものと見られる。

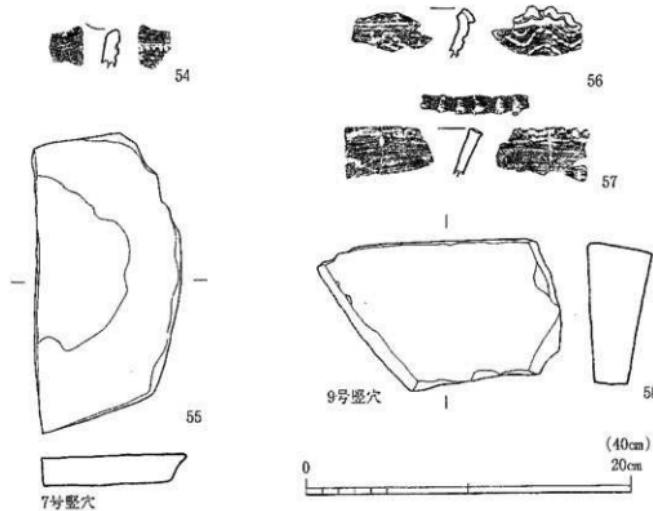
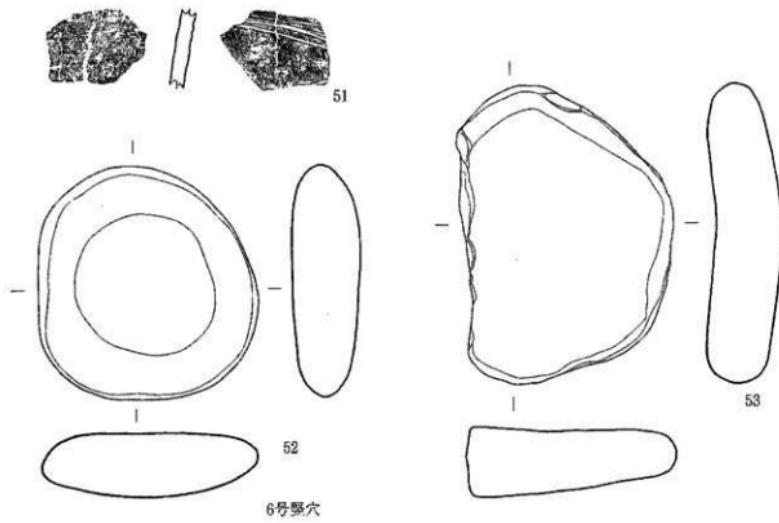
25号土坑（第36図）

26-48坑の北にある。やや不整な長楕円形を呈し、床面には凹部が見られる。長径は2.9m、短径は1.2m、最深部までの深さは約40cm。埋土中には炭化物が混入している。

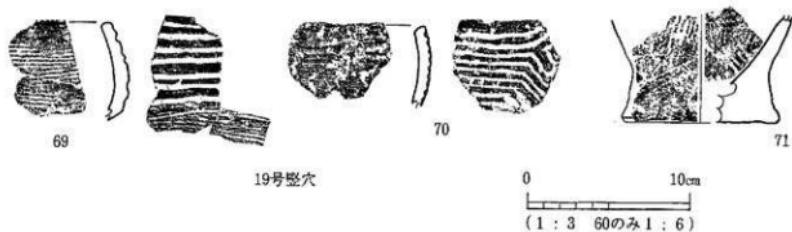
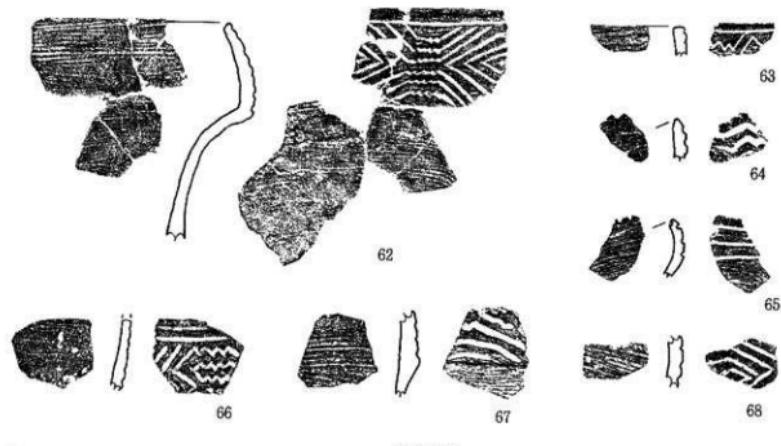
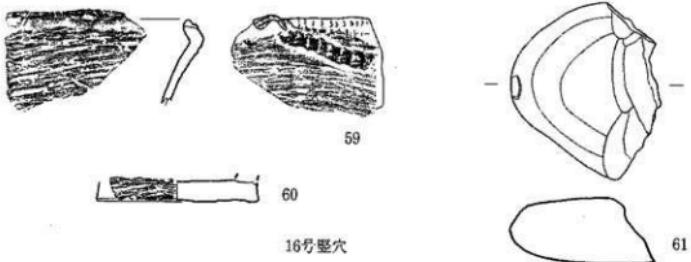
出土土器は晩期の後葉～末に属するものである（89～92）。

26号土坑（第37図）

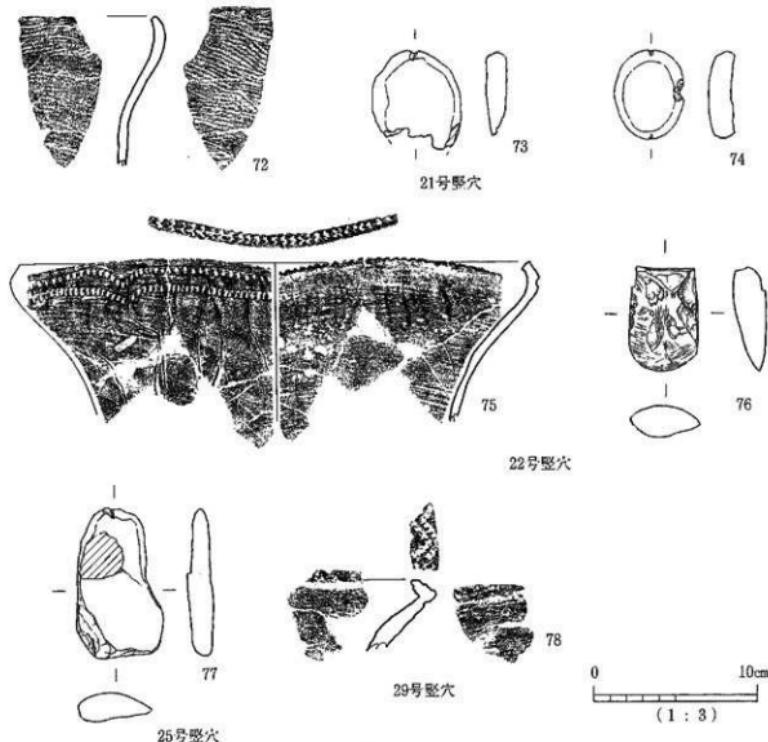
25号土坑の西で検出された円形土坑。径は1.0m、検出面からの深さは約45cmを測る。



第31図 竪穴出土遺物 (2) (1/3 + 1/6)



第32図 竪穴出土遺物 (3) (1/3・1/6)



第33図 窪穴出土遺物 (4) (1 / 3)

埋土上～中位よりおびただしい数量の上器片が出土している。深鉢（94・96）、鉢（93）など全て粗製の器種で占められる。その特徴より晩期に属するものであることは確実であるが、精製浅鉢の類が含まれないため、細かな時期の特定が難しい。

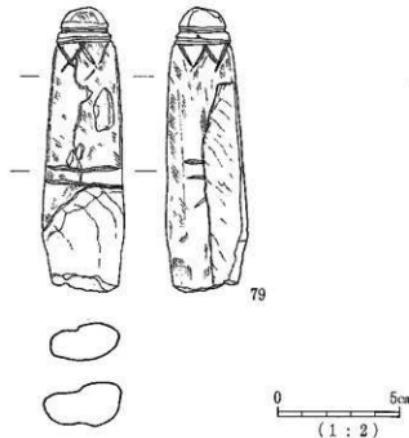
なお、27号～29号土坑も円形を呈するもので、26号と同時期の所産である可能性が高いが、目立った遺物は出土していない。

33号・34号・50号・51号・52号土坑

⑤群とした33号～59号土坑は、窪穴とともに中期の遺構集中箇所を形成するが、大部分は不整形で性格を充分把握できない落ち込みである。ここでは21号窪穴の東にある33号・34号・52号土坑と、34号土坑の北にある51号土坑を例示しておく。いずれも平面形は不整形で、遺物を少量含む。あるいは複数の土坑が重なった結果とも考えられるが、読みとることは容易でない。

50号土坑

21号窪穴の北にある。不整形ではあるが、床面は平坦に近く、遺物も若干量出土している。



第34図 35号土坑（21号竪穴関連）出土遺物（1／2）

60号土坑（第39図）

調査地北東端近くの43-60区にある円形土坑。上端部径は1.1mで、検出面から約25cm程下ったところに最大径部位がある。最大径は1.3m、床面までの深さは約60cm。図には示されていないが、周囲に5基の小ピットがある。埋土中にはアカホヤバミスや炭化物を多く含む。

埋土中～下位より土器片、自然礫が出土している。出土土器は101～108で、105などの精製浅鉢も見られる。102は深鉢の胴部の屈曲部で、それらの特徴から晩期中葉の時期に比定できよう。

61号土坑（第39図）

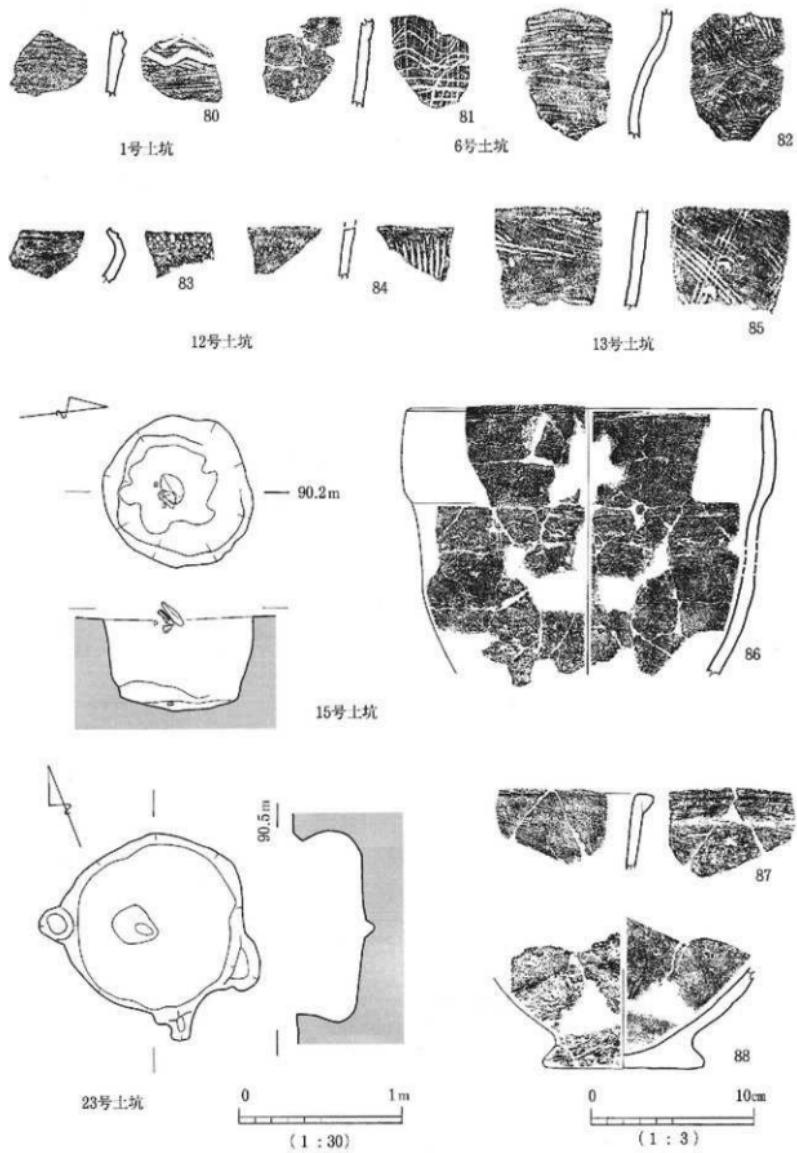
60号土坑の北東すぐ近くにある円形土坑。両土坑の間隔は1.2m程（第39図の平面図中にある両土坑の位置関係は正確なものである）。径は1.0m、検出面からの深さは約40cmを測る。60号土坑と関連する遺構であろうが、出土遺物が少なく、同時併存したのかどうか、判断できない。

62号土坑（第40図）

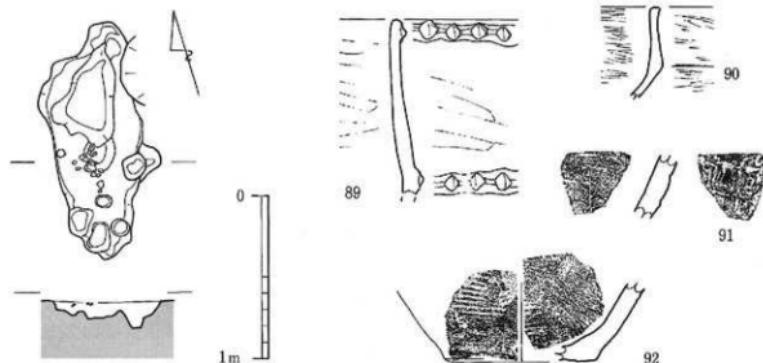
60号土坑の北東にある。やはり円形を呈する土坑で、断面形が台形状になる。北側床面には裂け目状の凹部がある。埋土中より石皿が4個体分出土している。土器はいずれも小破片で、口縁部に突起を巡らせる個体である（109-110）。

63号土坑（第40図）

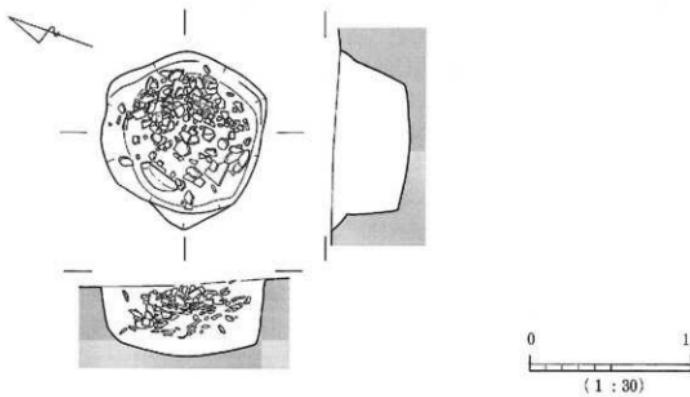
一連の円形土坑のうちの一つである。径は0.9m～1.0m、検出面からの深さは約35cm。埋土中に自然礫が見られた。砂岩の礫で、赤化しもろくなっている。出土土器は突起を巡らせる口縁部片（111）、精製浅鉢の口縁部片（112）など。



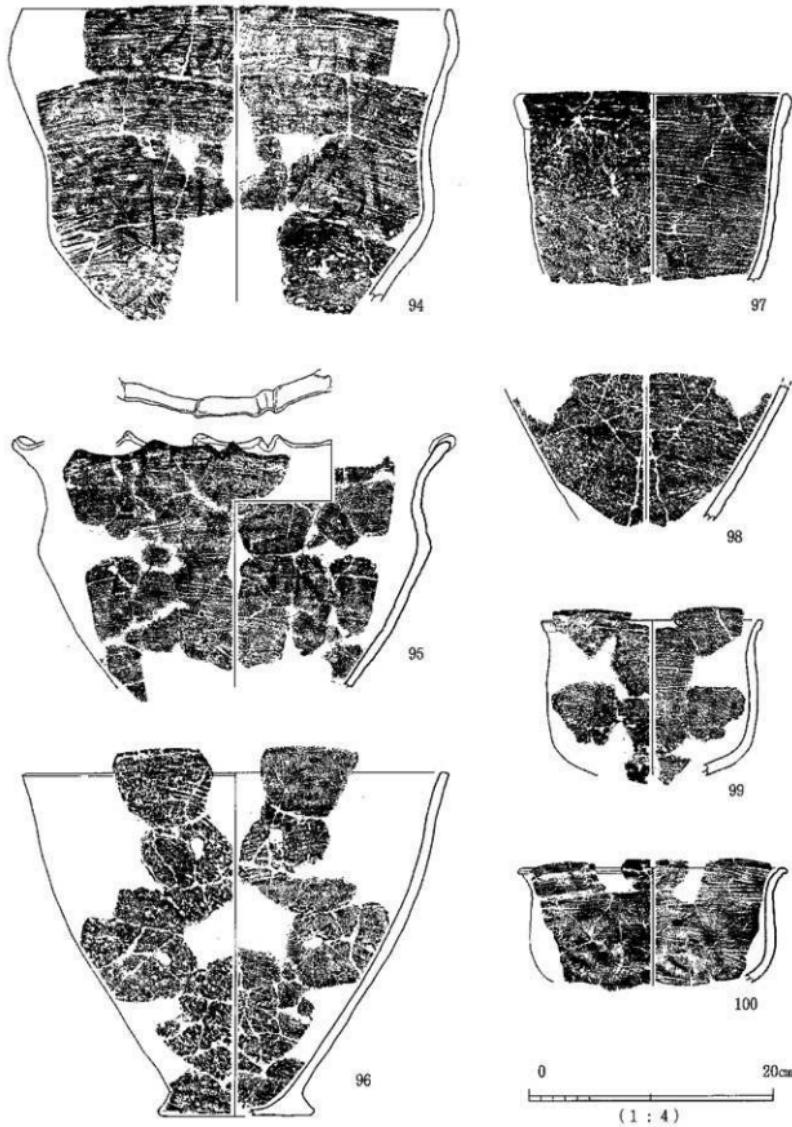
第35図 土坑 (1/30)・出土遺物 (1/3)



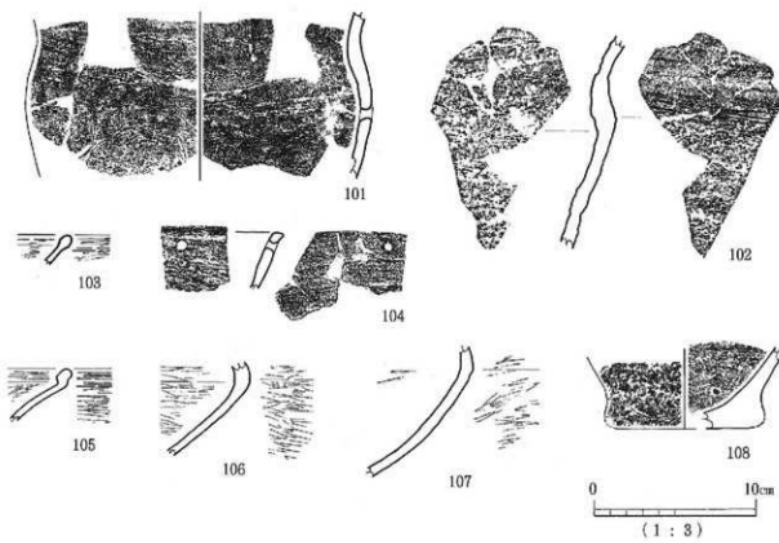
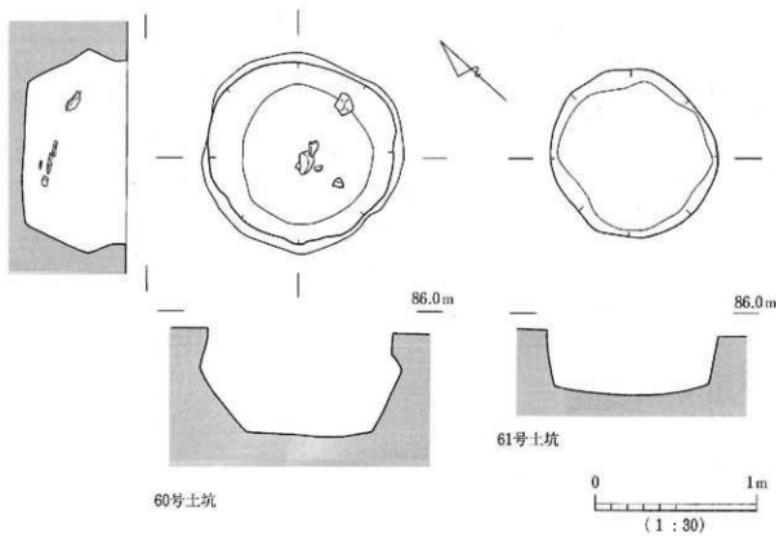
第36図 25号土坑 (1/30)・出土遺物 (1/3)



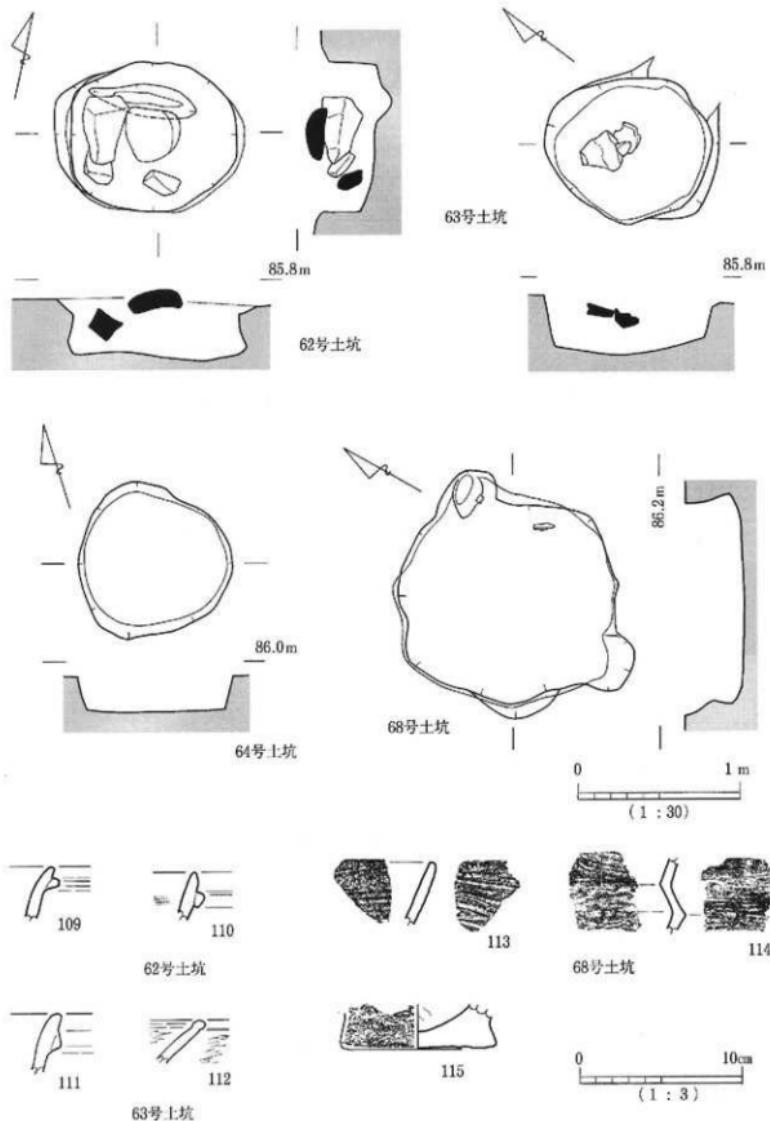
第37図 26号土坑 (1/30)・出土遺物 (1/4)



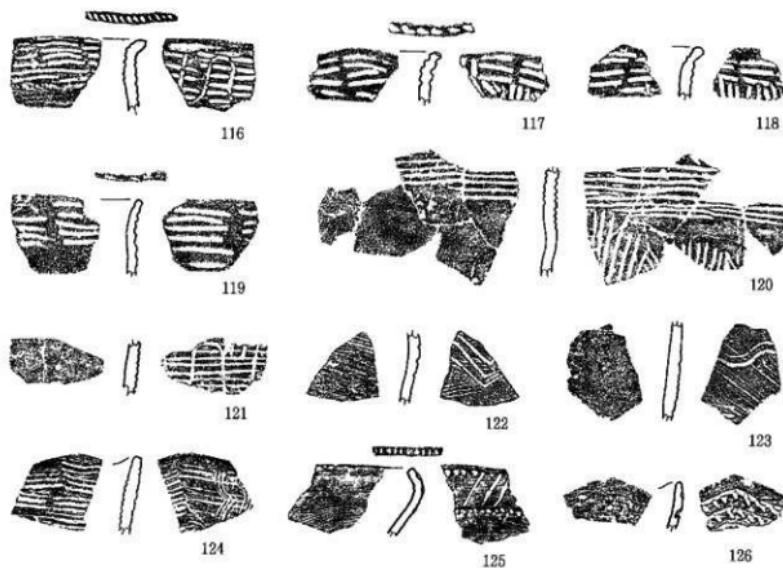
第38図 26号土坑出土遺物 (2) (1 / 4)



第39図 60・61号土坑 (1/30)・60号土坑出土遺物 (1/3)



第40図 62号・63号・64号・65号・68号土坑（1／30）・出土遺物（1／3）



第41図 包含層出土遺物 (1) (1 / 3)

6 4号土坑（第40図）

円形を呈する土坑で、60号土坑などと同形態のもの。黒褐色を呈する埋土の特徴も同じである。径は0.9m～1.0m、検出面からの深さは約45cm。出土遺物はごく少量であった。

6 8号土坑（第40図）

65号～68号土坑は、⑦群の他の土坑とは若干離れており、5号溝の南側付近にある。68号土坑は34-60杭の近くで検出された円形土坑。間口の狭い、台形状の断面形を呈し、そのためか上端部（検出面付近）は部分的に崩落していた。径は1.2m～1.3m、検出面からの深さは約40cm。

埋土中より晩期に属する土器片が出土している（113～115）。

以上のように、③・⑦群など、晩期に属する円形土坑群が検出されたが、該期の住居関連遺構は確認できなかった。

（3）包含層出土遺物

I c層中より縄文土器や石器が出上している。特に前～中期に属する土器片が、調査地南西～南側（遺構群の近く）と1号埋没谷の覆土中に多く見られた。ここでは特徴的な個体に絞り、取り上げる。

土器（第41～43図）

116～121は横・縦方向の沈線で文様を描くもので、曾畠式に属する。122～123は、条痕、ないしは条痕に付された平行沈線の上に重ねて、2～4本単位の平行沈線文を施すもの。

127～140は、口縁部が内湾し、全体の器形がキャリバー状を呈する一群で、南九州において、春日式と称される型式に属する。文様は、沈線文、貼付突蒂、刺突による連点文などで、文様帶は口縁部付近に集約される。そのことや、127など内湾の弱くなった器形などは新相を示す特徴とされる（1）。

141～144や146～149、155は沈線が部分的に波状・鋸歯状になるもので、18号竪穴出土土器や、後に触れる大平式との関係を考えたいところであるが、沈線の太さ、断面形や胎土の特徴は異なる。

なお、縄文や撚糸文を施す個体は皆無であった。126と155は胎土中に滑石を混入させている。

145・150～154は大平式である（2）。器形が判らない小破片が多いが、18号竪穴出土土器（62）や145などを指標にするならば、口縁部をわずかに肥厚させ、そこを文様帶とし、口縁部の下位には段を作出するようである。沈線には、150のような太いものと、153のような細く浅いもの（鋸歯状工具によるものか）という二者が認められる。

156～158は口唇部を拡張して文様帶にするもので、鋸歯文（156）、貝殻腹縁による押引文（157）、貼付突蒂文・連点文（158）などが施される。

159は口縁部を肥厚させ、断面二角形になるもので、押引による曲線文が施される。160は口縁部を内側に折る形で上端を平坦にする。文様は付されない。161は土製品で、全体の形状、時期は不詳。

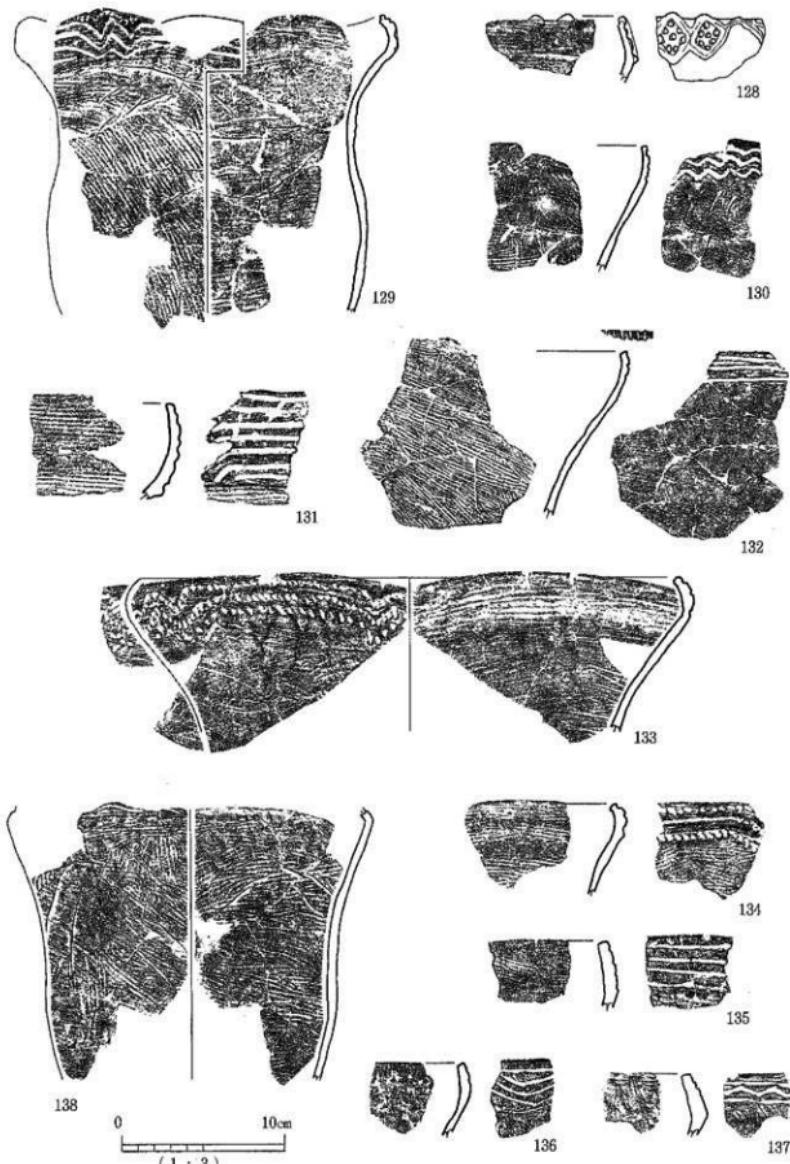
石器（第44・45図）

図化できたのはごく一部にとどまる。特に石皿（明瞭な凹面の認められないものも含む）、石鏃、剥片について、出土数量の多さに見合う分量の図化ができていない。また磨石、石錐についても、図化した資料は完形品の中から無作為に抽出したものである。

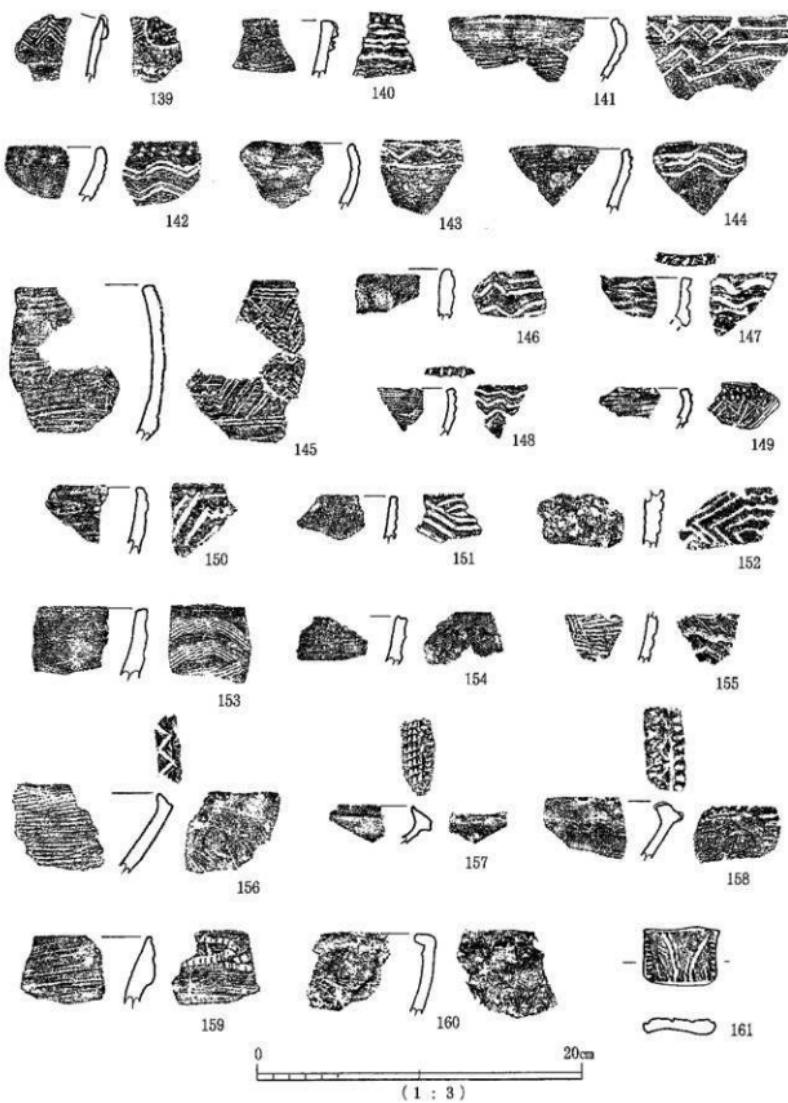
<註>

(1) 東 和幸 「鹿児島県における縄文中期の様相」『南九州縄文通信』5 1991 南九州縄文研究会

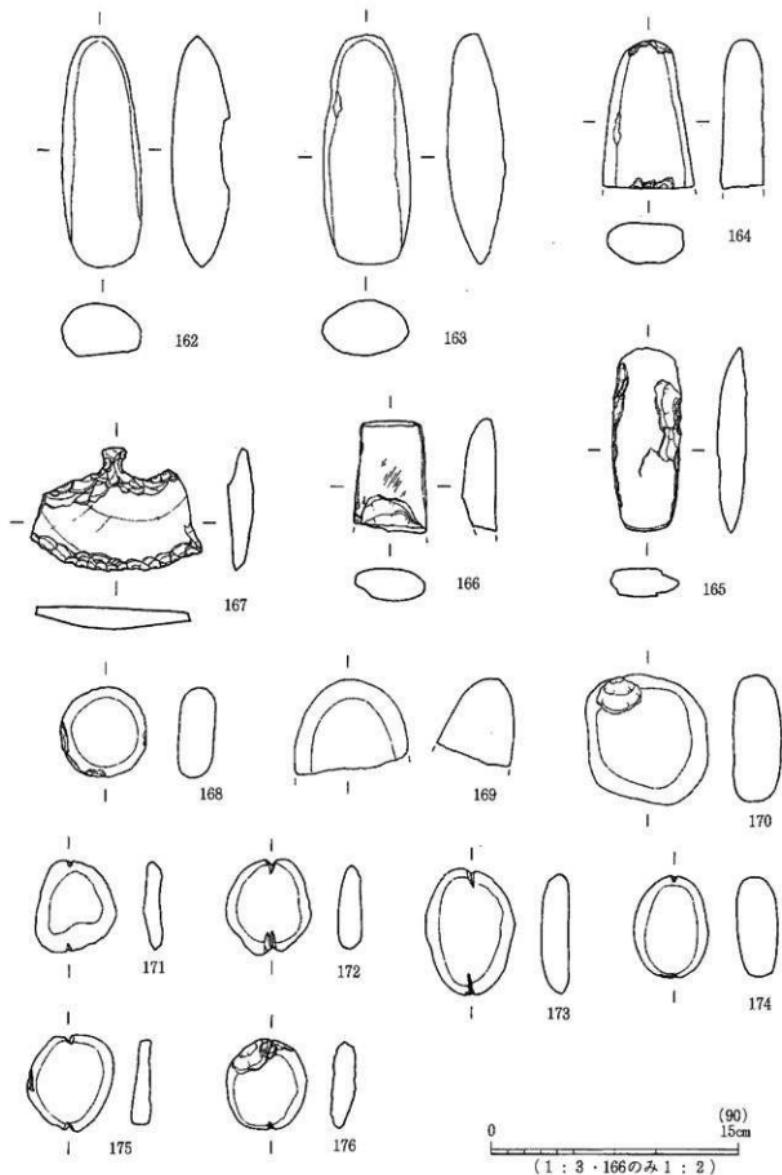
(2) 茂山 謙 「串間市大平出土の縄文式土器」『九州考古学』1



第42図 包含層出土遺物 (2) (1/3)



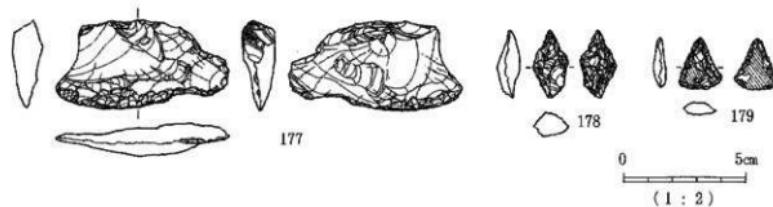
第43図 包含層出土遺物 (3) (1 / 3)



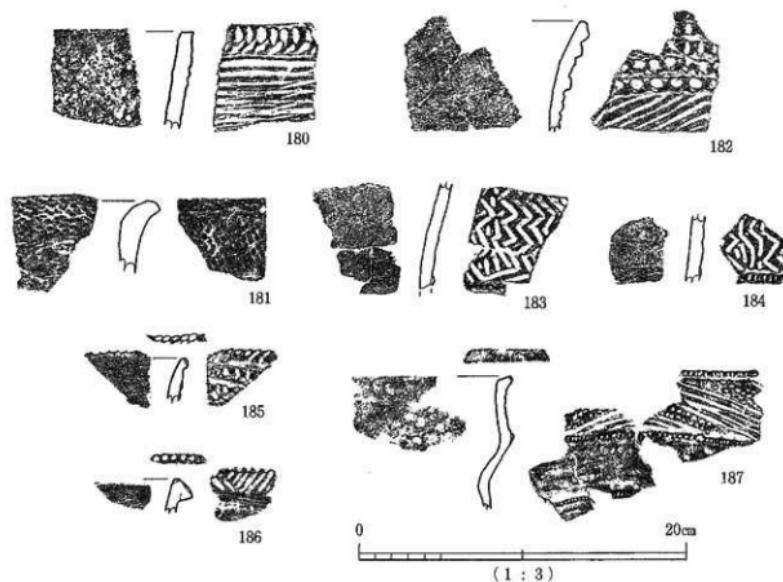
第44図 包含層出土遺物 (4) (1/3 · 1/2)

4 IV層以下の遺構・遺物

縄文時代早期の土器の一部を固化している(第46図)。180は前平式、181は押型文系に属するもの。182~184は手向川式、185~187は平柄式である。185は縦年的に遡る可能性がある。



第45図 包含層出土遺物 (5) (1/2)



第46図 包含層出土遺物 (6) (1/3)

第2表 出土土器観察表 (2)

器物 番号	種別	部 位	出上 地点	法 量(cm)		手筋・底文・文様はか 外 面	色 調		始 土の 年 代	備 考
				口 径	底 径		外 面	内 面		
43 織文	深鉢 口縁	SA2				ナデ、連点文	条痕	灰褐色 に赤い青緑	2mm以下の褐色、黒褐色。乳白色 の粒	
44 織文	深鉢 口縁	SA4				沈綴文、ナデ	ナデ	に赤い青緑	3.5mm以下の褐色、白色の粒	スス付着
45 織文	深鉢 口縁	SA4				刺突文、ナデ 沈綴文	沈縫、ナデ	に赤い青緑 に赤い青緑	に赤い青緑 に赤い青緑	
46 織文	深鉢 口縁	SA4				条痕	条痕	に赤い青緑 に赤い青緑	4mm以下の褐色、乳白色の粒、 光沢無	穿孔
51 織文	深鉢 唇部	SA5				沈綴文、ナデ	ナデ	に赤い青緑	2mm以下の灰白の粒	
54 織文	深鉢 口縁	SA7				刺突文、ナデ	ナデ	赤褐色	1.5mm以下の淡緑の粒	
56 横文	深鉢 口縁	SA9				ナデ、沈綴文	条痕	に赤い青緑	微細な光沢無	
57 織文	深鉢 口縁	SA9				刺目、条痕	ナデ	灰褐色	2mm以下の灰白の粒	
59 織文	深鉢 口縁	SA15				貝殻模様庄重文 条痕	条痕	僅 褐灰	1mm以下の褐色、乳白色の粒、 透明光沢	
60 織文	深鉢 底部	SA15	(10.0)			ナデ	ナデ	に赤い青緑 褐灰	2mm以下の乳白色、灰色の粒、 透明光沢	白色物付着
62 織文	口縁、唇部	SA18				沈綴文、ナデ	条痕	黑褐色	2mm以下の乳白色、淡緑の粒	
63 織文	深鉢 口縁	SA18				沈綴文、ナデ	ナデ	に赤い青緑 に赤い青緑	0.5mm以下の黄色の粒	
64 織文	深鉢 口縁	SA18				刺目、沈綴文、 ナデ	ナデ	に赤い青緑	0.5mm以下の褐色の粒	
65 織文	深鉢 口縁	SA18				剥貝、沈綴文、 ナデ	ナデ	に赤い青緑	1mmの乳白色の粒	
66 織文	深鉢 口縁	SA18				ナデ、沈綴文	ナデ	に赤い青緑 に赤い青緑	2mm以下の乳白色、黑色の粒	
67 織文	深鉢 唇部	SA18				ナデ、沈綴文	ナデ	に赤い青緑 に赤い青緑	2mm以下の淡褐色、褐色、黄色の 粒、透明光沢	
68 織文	深鉢 唇部	SA18				ナデ、沈綴文	ナデ	暗褐色	1mm以下の褐色、褐色、道崩の 粒	
69 織文	深鉢 唇部	SA19				沈綴文、ナデ	条痕	灰褐色	3mm以下の褐色、褐色の粒、光沢 有	
70 織文	深鉢 口縁	SA19				沈綴文、ナデ	ナデ	に赤い青緑 灰褐色	2mm以下の乳白色、褐色の粒、 光沢無	
71 織文	深鉢 底部	SA19	(9.2)			柔形 (武曲、ナデ)	条痕	に赤い青緑	灰褐色の粒、繊維な透明光沢有	白色物付着
72 織文	深鉢 口縁	SA21				柔形	柔形	に赤い青緑 に赤い青緑	1.5mm以下の灰白の粒	
75 織文	深鉢 口縁	SA22	(31.2)			連点文、ナデ	貝殻模様庄重文 ナデ	に赤い青緑 に赤い青緑	2mm以下の褐色の粒、 透明光沢	
78 織文	深鉢 口縁	SA29				押し引き文 ナデ	ナデ	に赤い青緑	2mm以下の褐色の粒	
80 織文	深鉢 唇部	SC1				沈綴文、ナデ 柔形	条痕、ナデ	明褐色	2mm以下の褐色、白色の粒、透明 光沢	
81 織文	深鉢 唇部	SC6				沈綴文、ナデ	ナデ	褐灰	7mm以下の褐色、明褐色、赤褐色 の粒、黑色光沢	
82 織文	深鉢 唇部	SC6				柔形	柔形	灰褐色	1.5mm以下の褐色の粒	スス付着
83 織文	深鉢 口縁	SC12				連点文、ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	3.5mm以下の褐色の粒、黑色光沢	スス付着
84 織文	深鉢 唇部	SC12				ナデ、沈綴文	ナデ	に赤い青緑 灰褐色	3mm以下の褐色、赤褐色、乳白色、 黑色の粒	
85 織文	深鉢 唇部	SC13				柔形文	ナデ	橙	1.5mm以下の褐色、乳白色の粒	
86 織文	深鉢 口縁~唇部	SC15	(21.6)			ナデ	ナデ	に赤い青緑 灰褐色	3mm以下の乳白色、褐色の粒、 透明光沢	
87 織文	深鉢 口縁	SC23				ナデ	ナデ	に赤い青 灰褐色	2mm以下の乳白色、灰色の粒	
88 織文	深鉢 脇部~底部	SC23	(9.8)			ナデ	ナデ	に赤い青 灰褐色	2mm以下の乳白色、黑色、淡褐色 の粒	
89 織文	深鉢 口縁~唇部	SC25				ナデ、ミガキ	ナデ	に赤い青 灰褐色	1.5mm以下の青、乳白色、灰色の 粒、暗褐色	
90 織文	深鉢 口縁	SC25				ミガキ	ミガキ	橙	1mm以下の透明、乳白色的粒、 透明光沢	
91 織文	深鉢 底部	SC25				組織痕	ナデ	に赤い青 灰褐色	2mm以下の透明、褐色の粒、 透明光沢	
92 織文	深鉢 底部	SC25	(9.2)			ナデ	ナデ	に赤い青 灰褐色	2.5mm以下の褐色、褐色の粒、 透明光沢	
93 織文	深鉢 口縁~脇部	SC26	(39.2)			ナデ	ナデ	浅黃褐色 灰褐色	4.5mm以下の褐色、黑色、黑色 の粒、透明光沢、黑色光沢	穿孔黒斑
94 織文	深鉢 口縁~脇部	SC26	35.6			ナデ	ナデ	明褐色 灰褐色	4mm以下の褐色、黑色、灰色の 粒	黒斑
95 織文	深鉢 口縁~脇部	SC26	(35.4)			ナデ	ナデ	浅黃褐色 灰褐色	2mm以下の褐色の粒、乳白色の粒、 黑色の光沢	
96 織文	深鉢 口縁~脇部	SC26	(34.6)	12.8	22.3	ナデ	ナデ	橙	2mm以下の褐色の粒、黑色、 黑色の光沢	
97 織文	深鉢 口縁~脇部	SC26	(25.8)			ナデ、条痕	ナデ	浅黃褐色 灰褐色	3mm以下の褐色、茶色、赤褐色、 黑色	黒斑
98 織文	深鉢 脇部	SC26				ナデ	ナデ	浅黃褐色	4mm以下の褐色、黑色、黑色光沢、 透明光沢	
99 織文	深鉢 口縁~脇部	SC26	(18.2)			ナデ	ナデ	浅黃褐色	4mm以下の褐色、黑色、黑色光沢、 透明光沢	
100 織文	深鉢 口縁~脇部	SC26	(21.4)			柔形、ナデ	条痕、ナデ	に赤い青 灰褐色	3mm以下の褐色、黑色、黑色の粒、 黑色、白色的光沢	

第3表 出土土器觀察表 (3)

著者 者号	種別	基 本 形 状	出 土 地 点	法 量 (cm)		手法・調査・文様ほか		色 調		地 上 の 特 徴	備 考	
				口 径	底 径	器 高	外 面	内 面	外 面	内 面		
101 織文	深鉢	脚部-副部	SC60				ナデ	ナデ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い褐色 灰褐色の粒	3mm以下の赤褐色・乳白色・ 灰褐色の粒	砂孔 スヌ付背
102 織文	深鉢	脚部	SC60				ナデ	ナデ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	2mm以下の灰白色・黒褐色の粒	
103 織文	深鉢	口縁	SC60				ミガキ	ミガキ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	2mm以下の灰褐色の粒	
104 織文	深鉢	口縁	SC60				ナデ	ナデ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	2mm以下の灰褐色・灰褐色 色の粒	
105 織文	深鉢	口縁	SC60				ミガキ	ミガキ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	1mm以下の乳白色・黑褐色 色の粒、透明光沢粒	
106 織文	深鉢	脚部	SC60				ミガキ	ミガキ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	微細な乳白色・灰褐色の粒	スヌ付背
107 織文	深鉢	脚部	SC60				ミガキ	ナデ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	5mm以下の灰褐色・黑色・ 灰褐色の粒	
108 織文	深鉢	脚部	SC60	(9.4)			ナデ	ナデ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	2mm以下の灰褐色・灰褐色 色の粒	
109 織文	深鉢	口縁	SC62				ナデ	ナデ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	1mm以下の乳白色・灰褐色 色の粒	
110 織文	深鉢	口縁	SC62				ナデ	ナデ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	1mm以下の乳白色・灰褐色 色の粒	
111 織文	深鉢	口縁	SC63				ナデ	ナデ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	1mm以下の乳白色・白色・ 灰褐色の粒	
112 織文	深鉢	口縁	SC63				ミガキ	ミガキ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	2mm以下の乳白色・黑色・ 灰褐色の粒	
113 織文	深鉢	口縁	SC68				柔軟	小デ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	1mm以下の灰褐色の粒、透明光沢 粒	
114 織文	深鉢	脚部	SC68				柔軟	柔軟	灰褐色	灰褐色	3mm以下の灰褐色の粒、透明光沢 粒	
115 織文	深鉢	脚部	SC68	9.7			ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	3.5mm以下の灰褐色の粒	
116 織文	深鉢	口縁	42-47				細目、ナデ 沈綴文	沈綴文、ナデ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	2mm以下の灰褐色・黑色の微粒	
117 織文	深鉢	口縁	44-49				遠点文、沈綴文 ナデ	沈綴文、ナデ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	3mm以下の灰褐色・灰褐色 色の粒	
118 織文	深鉢	口縁	43-48				ナデ、沈綴文	沈綴文	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	3mm以下の灰褐色・淡黄色・灰褐色 色の粒	
119 織文	深鉢	口縁	40-49				遠点文、沈綴文	沈綴文、ナデ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	1mm以下の乳白色・黃褐色の粒	
120 織文	深鉢	脚部	42-47				沈綴文、ナデ	沈綴文、ナデ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	4mm以下の灰褐色・黑色の粒、 透明光沢粒	
121 織文	深鉢	脚部	44-47				沈綴文	ナデ	灰褐色	灰褐色	3mm以下の灰褐色の粒	
122 織文	深鉢	脚部	46-50				柔軟	柔軟	灰褐色	灰褐色	2mm以下の灰褐色・黑色の粒、 透明光沢粒	
123 織文	深鉢	脚部	44-47				沈綴文、ナデ	ナデ	柔軟	柔軟	4mm以下の灰褐色・黑色の粒、 透明光沢粒	
124 織文	深鉢	口縁	44-47				ナデ、沈綴文	ナデ、沈綴文	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	1mm以下の乳白色・黑色・うす模様 の粒、黑色・透明の光沢粒	
125 織文	深鉢	口縁	47-51				遠点文、沈綴文 ナデ	割口、ナデ	柔軟	柔軟	微細な淡黄色の粒、透明光沢粒	
126 織文	深鉢	口縁	—				ナデ、沈綴文	ナデ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	1mm以下の乳白色の粒	滑り深入
127 織文	深鉢	口縁-脚部	谷2 (33.5)				割口、遠点文 柔軟	柔軟	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	2mm以下の黒褐色・灰褐色・灰褐色の粒	スヌ付背
128 織文	深鉢	口縁	43-47				柔軟	柔軟	明赤褐色	に赤い青褐色 灰褐色	2.5mm以下の深灰色・乳白色の粒	
129 織文	脚部	脚部	谷2 (21.5)				足跡痕跡-深鉢 沈綴文 柔軟	柔軟	灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	3mm以下の乳白色・乳白色・黑色の 粒、光沢粒	
130 織文	深鉢	口縁	谷2				ナデ、沈綴文	ナデ	灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	1.5mm以下の乳白色・黑色の 粒、光沢粒	スヌ付背
131 織文	深鉢	口縁	46-57				沈綴文、ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	2mm以下の灰褐色の粒	
132 織文	深鉢	口縁	谷2				細目、沈綴文 ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	1.5mm以下の乳白色・黑色の 粒、光沢粒	
133 織文	深鉢	口縁-脚部	47-51				刺突、ナデ	柔軟	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	2mm以下の灰褐色の粒	
134 織文	深鉢	口縁	谷2				沈綴、刺突文 ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	1.5mm以下の乳白色の粒、透明光沢 粒	スヌ付背
135 織文	深鉢	口縁	谷2				刺突、ナデ	ナデ	刺突	刺突	1.5mm以下の乳白色の粒、透明光沢 粒	
136 織文	深鉢	口縁	46-57				ナデ、沈綴文	ナデ	柔軟	柔軟	4.5mm以下の乳白色の粒	
137 織文	深鉢	口縁	46-51				沈綴文、柔軟	柔軟	柔軟	柔軟	3mm以下の乳白色の粒、黄褐色の粒、 透明光沢粒	
138 織文	深鉢	脚部	谷2				沈綴文、ナデ	ナデ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	2mm以下の黒褐色・深褐色・茶色の粒	
139 織文	深鉢	脚部	谷2				沈綴、遠点文 ナデ	沈綴文、ナデ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	微細な黒褐色・乳白色の粒、透明光 沢粒	
140 織文	深鉢	口縁	45-51				ナデ、遠点文 沈綴文	ナデ	柔軟	柔軟	2mm以下の透明の粒	
141 織文	深鉢	口縁	谷2				ナデ、沈綴文	柔軟	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	2mm以下の乳白色・黑色の粒、 光沢粒	
142 織文	深鉢	口縁	42-48				遠点文、沈綴文 ナデ	ナデ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	4mm以下の乳白色・黑色・灰褐色の 粒、透明光沢粒	
143 織文	深鉢	口縁	47-50				沈綴文、ナデ	ナデ	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	3mm以下の乳白色の粒、透明光 沢粒	スヌ付背
144 織文	深鉢	口縁	谷2				沈綴文、ナデ	柔軟	に赤い青褐色 灰褐色	に赤い青褐色 灰褐色	2mm以下の乳白色の粒、透明光 沢粒	

第4表 出土土器観察表 (4)

遺物 番号	種 類	器 種 名 称	出 土 地 点	法 量 (cm)		手法・調整・文様はか			色 調		地 上 の 特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高	外 面	内 面	外 面	内 面		
145	縦文	深鉢 口縁	47-57				ナデ、平行沈線文	ナデ	にぶい白陶	にぶい白陶	1 mm以下の乳白色、黒色、高級の 紋、光沢	
146	縦文	深鉢 口縁	45-51				ナデ、沈線文	ナデ	明黄褐	明黄褐	2 mm以下の乳白色、褐褐色の紋、 高級な光沢	
147	縦文	深鉢 口縁	谷2				割目、沈線文	ナデ	褐	褐	1 mm以下の透明、黒色の光沢	
148	縦文	深鉢 口縁	47-29				割目、沈線文	条痕	黄灰	にぶい黄	3 mm以下の乳白色の紋、黒色、 透明の光沢	
149	縦文	深鉢 口縁	47-30				波点文、沈線文	条痕	黒褐	黒褐	1 mm以下の乳白色の紋、黒色、 透明の光沢	
150	縦文	深鉢 口縁	46-60				沈線文、ナデ	ナデ	褐	褐	1 mm以下の乳白色	
151	縦文	深鉢 口縁	46-60				ナデ、沈線文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	3 mm以下の乳白色、黒色	
152	縦文	深鉢 口縁	46-57				沈線文、ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	2 mm以下の乳白色、黒色、 透明の紋	
153	縦文	深鉢 口縁	谷2				ナデ、平行沈線文	ナデ	褐	褐	1 mm以下の乳白色、乳白色の紋、 透明光沢	
154	縦文	深鉢 口縁	45-57				ナデ、平行沈線文	条痕	明赤褐	にぶい褐	2 mm以下の乳白色の紋、透明、 黒色の光沢	
155	縦文	深鉢 口縁	46-37				ナデ、沈線文	条痕	灰青褐 黑褐	灰青褐 黑褐	2 mm以下の乳白色、黒色の紋、 光沢	
156	縦文	深鉢 口縁	谷2				沈線文、ナデ	条痕	黑褐	黑褐	4 mm以下の乳白色、褐色の紋、 透明、黒色の光沢	
157	縦文	深鉢 口縁	谷2				只模擬深江底文	ナデ	にぶい褐 灰褐	にぶい褐 灰褐	1 mm以下の乳白色、黒色の紋	
158	縦文	深鉢 口縁	谷2				只模擬深江底文 刻目 ナデ	ナデ	にぶい褐 灰褐	にぶい褐 灰褐	2 mm以下の乳白色、黒色の紋、 透明の光沢	
159	縦文	深鉢 口縁	40-51				沈線文、ナデ	条痕	にぶい褐 灰褐	にぶい褐 灰褐	3 mm以下の乳白色、黒色の紋、 透明の光沢	
160	縦文	深鉢 口縁	46-59				ナデ	ナデ	にぶい褐 灰褐	にぶい褐 灰褐	4 mm以下の乳白色、褐色の紋、 透明、黒色の光沢	
161	縦文	土製品	谷2				沈線文、連点文	ナデ	にぶい褐 灰褐	にぶい褐 灰褐	5 mm以下の乳白色、赤褐色、 茶褐色、赤褐色の紋	
180	縦文	深鉢 口縁	52-36 51-55				割目、条痕	ナデ	浅黄褐 灰褐	浅黄褐 灰褐	3 mm以下の乳白色、赤褐色、 黑色の光沢	
181	縦文	深鉢 口縁	46-30				押型文	押型文、ナデ	にぶい黄	にぶい黄	2.5mm以上の白色の紋、透明光沢	
182	縦文	深鉢 口縁	32-35 60-61				突筋、押点文	ナデ	灰黄	浅黄	3 mm以下の乳白色、褐色の紋、黑色 光沢	
183	縦文	深鉢 口縁	31-53				沈線文、割目	ナデ	にぶい褐 灰褐	にぶい褐 灰褐	2 mm以下の乳白色、赤褐色、 黑色の光沢	
184	縦文	深鉢 口縁	31-53				沈線文、割目	ナデ	にぶい褐 灰褐	にぶい褐 灰褐	4 mm以下の乳白色、赤褐色、 黑色の光沢	
185	縦文	深鉢 口縁	35-51				割目	ナデ	にぶい褐 灰褐	にぶい褐 灰褐	2.5mm以下の乳白色、乳白色的紋、 光沢	
186	縦文	深鉢 口縁	46-56				割目、ナデ	ナデ	にぶい褐 灰褐	にぶい褐 灰褐	3 mm以下の乳白色、黑色の紋	
187	縦文	深鉢 口縁、網部	33-67 68				割目、沈線文	ナデ	褐	褐	3 mm以下の乳白色、黑色の紋、 透明光沢	

第5表 出土石器計測表

遺物 番号	器 種	出 土 地 点	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 材	備 考
3	砥石	SA1001	8.00	2.60	0.60	24.30	粘板岩	
6	石皿	SA1002	30.80	24.10	10.15	13.00	砂岩	
27	右包丁	SA1003	3.50	9.75	0.45	26.80	頁岩	
47	石皿	SA4	28.40	33.90	10.40	15.20	砂岩	
48	砥石	SA4	15.25	15.30	6.60	1,400.00	凝灰岩	
49	石皿	SA5	28.90	24.80	6.70	8,900.00	砂岩	
50	石皿	SA5	23.55	15.30	7.65	3,100.00	砂岩	
62	右包丁	SA6	28.35	26.15	8.00	9,200.00	砂岩	
53	石皿	SA6	37.50	25.10	8.45	1,200.00	砂岩	
55	台石	SA7	36.50	18.05	3.60	4,250.00	砂岩	
58	台石	SA9	29.50	18.50	7.75	3,500.00	砂岩	
61	叩石?	SA15	—	21.80	8.15	3,800.00	砂岩	
73	石鍬	SA21	5.95	5.40	1.25	62.70	磨砂板岩	
74	石鍬	SA21	5.40	4.20	1.50	50.10	砂岩	
76	石斧	SA22	6.30	4.20	2.00	65.70	頁岩	
77	石鍬	SA25	9.10	8.30	1.60	97.40	安息岩	
79	石劍	SO62	—	3.40	1.40	83.30	綠泥片岩	
162	右斧	谷5	14.05	4.90	3.15	333.30	砂岩	

遺物 番号	器 種	出 土 地 点	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 材	備 考
163	右斧	43-48	14.00	5.25	3.30	372.30	砂岩	
164	右斧	谷2	—	(5.60)	(2.60)	202.5	砂岩	
165	石斧	32-38/51-55	11.2	4.10	1.75	124.50	真岩	
166	石斧	45-52	6.9	4.50	2.10	104.40	砂岩	
167	石刀	32-33/32-35	5.08	7.00	1.05	31.10	頁岩	
168	磨石	43-48	7.25	7.10	3.15	233.50	砂岩	
169	磨石	SX1	9.25	7.75	6.25	596.40	砂岩	
170	磨石	43-48	10.06	10.00	4.00	681.90	砂岩	
171	石錐	谷2	5.50	5.00	1.00	44.20	ホルムヒルス	
172	石錐	谷2	5.70	5.20	1.50	6.41	頁岩	
173	石錐	谷2	7.60	5.40	1.70	105.20	砂岩	
174	石錐	谷2	6.20	4.55	2.50	101.10	砂岩	
175	石錐	46-50	5.80	5.10	1.20	43.50	砂岩	
176	石錐	谷2	5.50	4.90	1.40	52.40	砂岩	
177	スレーブ	29-60	3.60	7.10	1.35	28.20	チャート	
178	石錐	31-59	2.75	1.45	0.95	2.70	チャート	
179	石錐	34-48	2.05	1.75	0.50	1.60	頁岩	

第3節 まとめ

第2遺跡同様、新しい時代から調査の流れに沿って、特徴的な遺構・遺物の紹介を行いたい。

弥生時代終末期～古墳時代初頭の竪穴住居跡に関しては、基礎構造が判明し、良好な遺物のセットを捉えることができた。扁平礫が高い比率で認められる点も興味深い。1005号竪穴住居跡出土の石包丁(27)は、該期まで石製の収穫具が残存する事例の一つとなる。

古墳時代の「土器埋納遺構」としたものについては、本文中で、「水」「水源」への祭祀の遺構であるとの解釈を加えた説明を行った。特異とも言えるこの遺構について、事実のみを記しただけでは不十分と考えてのことである。出土した搬入品と見られる布留式系土器(34)は、やや器壁が厚めながら球形腹を呈し、肩部に横ハケを施すなど比較的古い様相を示している⁽¹⁾。そこから、この遺構の土器群を一括資料と認定した場合の、他地域との並行関係がおさえられる。

縄文時代中期の竪穴・土坑群も、今後の研究のための重要な資料となるものである。ただし、遺構内に残された遺物が少なかったことから、個々の遺構の細かな所属時期の決定が難しい点が惜しまれる。大きくは中期中葉～後葉の春日式期(森木ヶ迫段階)から後葉～末に位置づけられる大平式期までの間存続した遺構群ということになろう⁽²⁾。その中では18号竪穴が明確に大平式期と認定できるものである。なお、多くの竪穴が、床面中央部に土坑を有する点は注目しておくべきであろう。

春日式期の21号竪穴内で検出された石組炉は、当地域では初見となる遺構である⁽³⁾。この21号竪穴の形態については本文中にも記したようにやや明確さを欠き、石劍(79)を出土した35号土坑との関係も、切り合い・同時併存のいずれとも決し得なかった。同時併存とした場合、21号竪穴は張り出し部の付く形態となる。東日本に見られる柄鏡形住居跡⁽⁴⁾と関連付けるのは、飛躍しすぎであろうか。

当遺跡出土の春日式土器は、口縁部の内湾の度合いが弱いことや文様帶を口縁部に集約させることなど、新相を示すものである。東 和幸氏は、大平式を春日式の次段階に位置づけており⁽⁵⁾、本文中でも記したように文様の面で両者の間には近縁性が認められる。一方で、最新段階の春日式と大平式の間には器形の面でヒアタスを認めざるを得ないし、沈線の断面形などの特徴も異なる。さらにテフロクロノロジーの成果も直接的な繋がりに対して否定的であるという⁽⁶⁾。ここではそれらについて論じる余裕がない。後日検討してみたい。

アカホヤ層下位の縄文時代早期・草創期の文化層についてはほとんど存在の確認にとどまってしまった。いずれの型式の土器も出土量は少なく、第2遺跡同様、分布密度は著しく低いと見られる。

<註>

- (1) 米田敏幸 「土師器の編年 1近畿」『古墳時代の研究』6 1991 雄山閣
- (2) 東 和幸 「鹿児島県における縄文中期の様相」『南九州縄文通信』5 1991 南九州縄文研究会
- (3) 田町の天神河内第1遺跡のIV層中で、やはり扁平な礫を用いた石組(「配石遺構」)が検出されており、構成礫が赤し、周囲に焼土や炭化物を含んだ層が見られるという。
- (4) 山本啄久 「柄鏡形(敷石)住居と石棒祭祀」『縄文時代』7 1996 縄文時代文化研究会
- (5) 東 和幸 「春日敷き土器の型式編列」『鹿児島考古』23 1989 鹿児島県考古学会
- (6) 春日式は霧島御池ボラ層の下位より、大平式は上位より出土する。桑畠光博氏のご教示による。



上の原第1遺跡全景（手前は上の原第4遺跡）



調査地北東部



調査地南西部



調査地南部



26~28~48~54区（北東部）



37~40~62~67区



29~32~47~52区



1号埋没谷



32~38~51~55区



3号埋没谷付近作業状況



34~36~53~54区



4号埋没谷頂部付近



5号埋没谷



1003号竖穴



1号溝



1004号竖穴



1001号竖穴



1005号竖穴



1002号竖穴



1006号竖穴



「土器埋納」遺構



土層の状況



土器 32



土器 34ほか



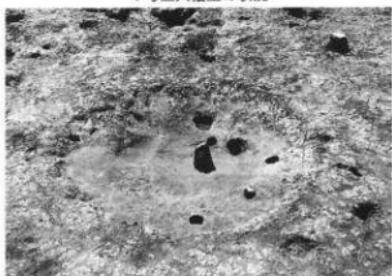
土器 36



1号竪穴覆土の状況



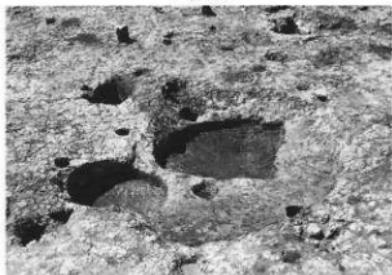
8号竪穴



1号竪穴



11号竪穴



2号竪穴



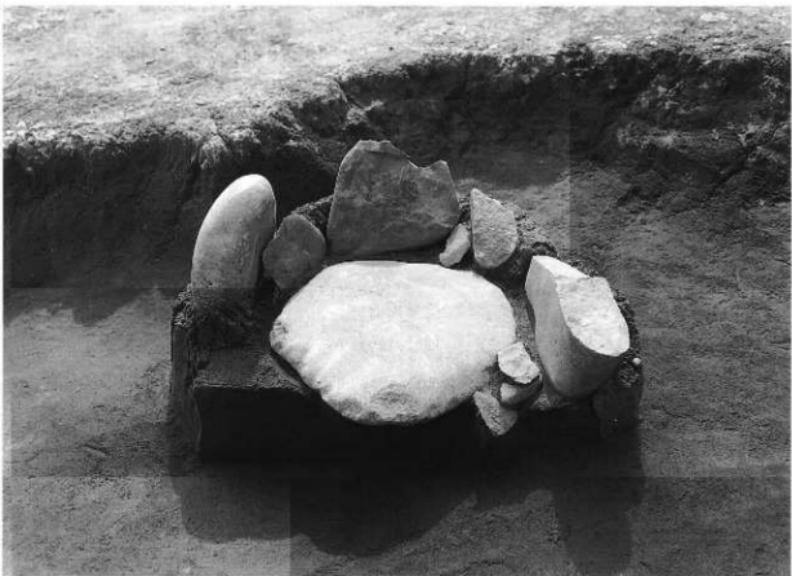
12号～16号竪穴



4号～6号竪穴



17号竪穴



21号土坑内石組爐



18号～20号竪穴



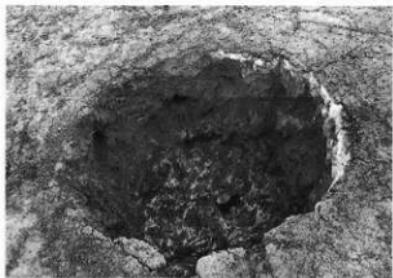
21号竪穴・35号土坑



18号～21号竪穴付近



22号竪穴



15号土坑



26号土坑



23号土坑



60号土坑



25号土坑



62号土坑



26号土坑遺物出土状況



深掘り区における層位



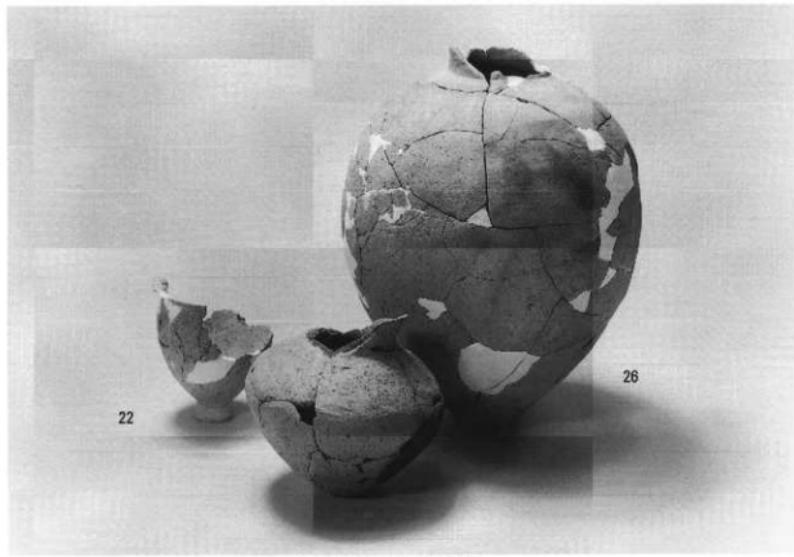
1001号竖穴出土遗物



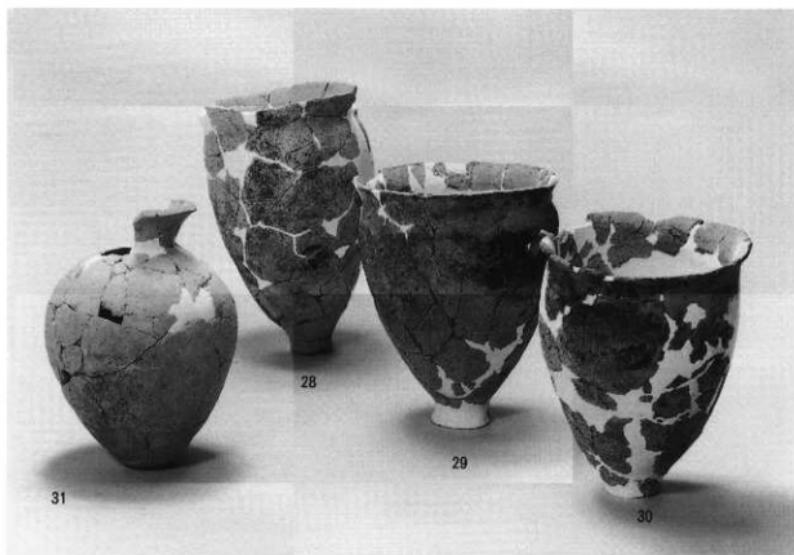
1003号竖穴出土遗物



1004号竖穴出土遺物



1005号竖穴出土遺物



1006号竪穴出土遺物



「土器埋納」遺構出土遺物